



彼と彼女におじさんプラス

彼と彼女の間に いつの間にか入り込んでいる  
催眠術マスターおじさんたちが  
やりたい放題するお話

どんな感じの催眠をかけられてスタートするのか簡単に書いておきます

- ①寧々はおじさん(××)の「お願い」を何故か聞いてあげることになっています  
彼氏の〇〇君に知られなければOKといった感じです  
〇〇君も嫉妬や不安を感じつつも邪魔しないようにされています
- ②愛花は彼氏のM君の命令ならどんなハードな内容でも聞くようにされています  
しかしM君はおじさん(□□)の言いなり人形です
- ③凜子はおじさん(△△)との浮気セックスにドキドキといった感じでシンプル

とある日 ○○と寧々は放課後を共にすごしていた

「ふふっ そうなの それでね〜」

「え〜 なんだよそれ〜 ははっ…ん？あれ？  
xxさんじゃね…」


「え？」

「こっち来るぞ…」

「あ…」

この時点ですでにxxは○○と寧々共通の知り合い  
○○はxxが極悪だとは思っていない(と思わされている)





「なんだよ～寧々ちゃん～ 今日俺と約束があったのに酷いじゃん～」

「寧々さん…なんか用事があったの？」

「う、うん…まあ」

「まあ彼氏が最優先なのはしょうがないけど  
連絡くらいはしなかったなあ～」

「ご、ごめんなさい…」

「今からでも遅くないから…寧々ちゃんをお借りしても  
いいかな○○君？」

「え？ああ…先約があったなら…まあ」

「彼氏さんからお許しがでたよ寧々ちゃん  
さっ 行こうよ」

「そ、そうですね…じゃあ○○君…また明日」

「うん」

「あのさあ寧々ちゃん…俺の〈お願い〉を聞いてくれないと困っちゃうな〜」

「そ、それはわかってますけど…」

「あ、ひょっとして彼氏の〇〇君の事が気になっちゃってるの？」

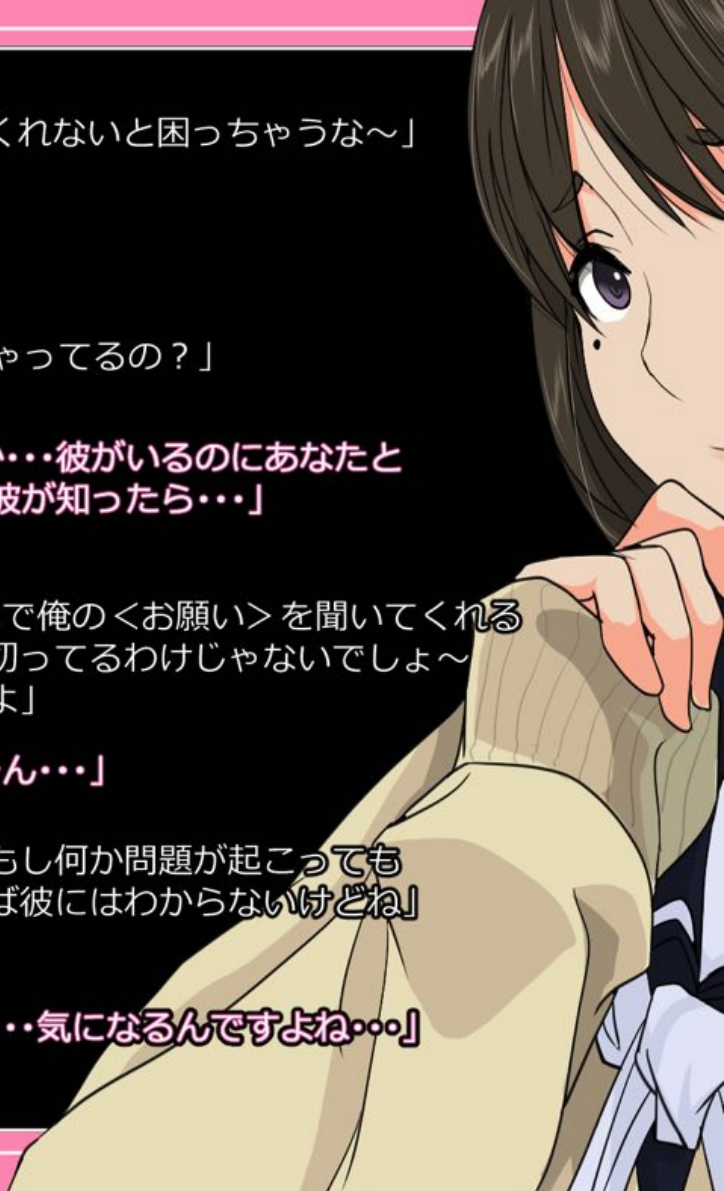
「そりゃそうですよ…だって…変じゃないですか…彼がいるのにあなたと…するなんて…それに私がそんな事したなんて彼が知ったら…」

「別に变じゃないよ〜 それに寧々ちゃんはおくまで俺の〈お願い〉を聞いてくれる優しい人ってだけで浮気じゃないんだから彼を裏切ってるわけじゃないでしょ〜 もし知られちゃってもあんまり問題ないとおもうよ」

「う〜ん…まあ…そうなのかなあ…でも…う〜ん…」

「それに君たちの関係を壊す気は全くないからさ、もし何か問題が起こっても必ずフォローするから安心してよ。まあ、黙ってれば彼にはわからないけどね」

「う、う〜ん…でも…隠し事してるみたいなのが…気になるんですよね…」



「それじゃあ 彼に電話する？」

「<今日はこれからセックスして処女を俺(××)にあげちゃいます、でも俺(××)の願いをしかたなく聞いてあげるだけなんで浮気じゃない>って、それなら隠すことにはならないでしょ？」

「そっ、そんな…ダメです…ダメに決まってるでしょ…」

「ダメかあ～…じゃあ彼には黙っていよっか俺と寧々ちゃんの秘密にするって事でいいね」

「その…××さんと…その…するのは…決定なんですね…」

「そりゃそうだよ、やっぱ初めてだから怖いのかな？」

「それも…まあ…ありますよ…痛いっていうし…」

「それは大丈夫！おまじないしといたから、痛いどころか気持ちよくてビクンビクンしちゃうよ～ 楽しみにしててイイヨ」

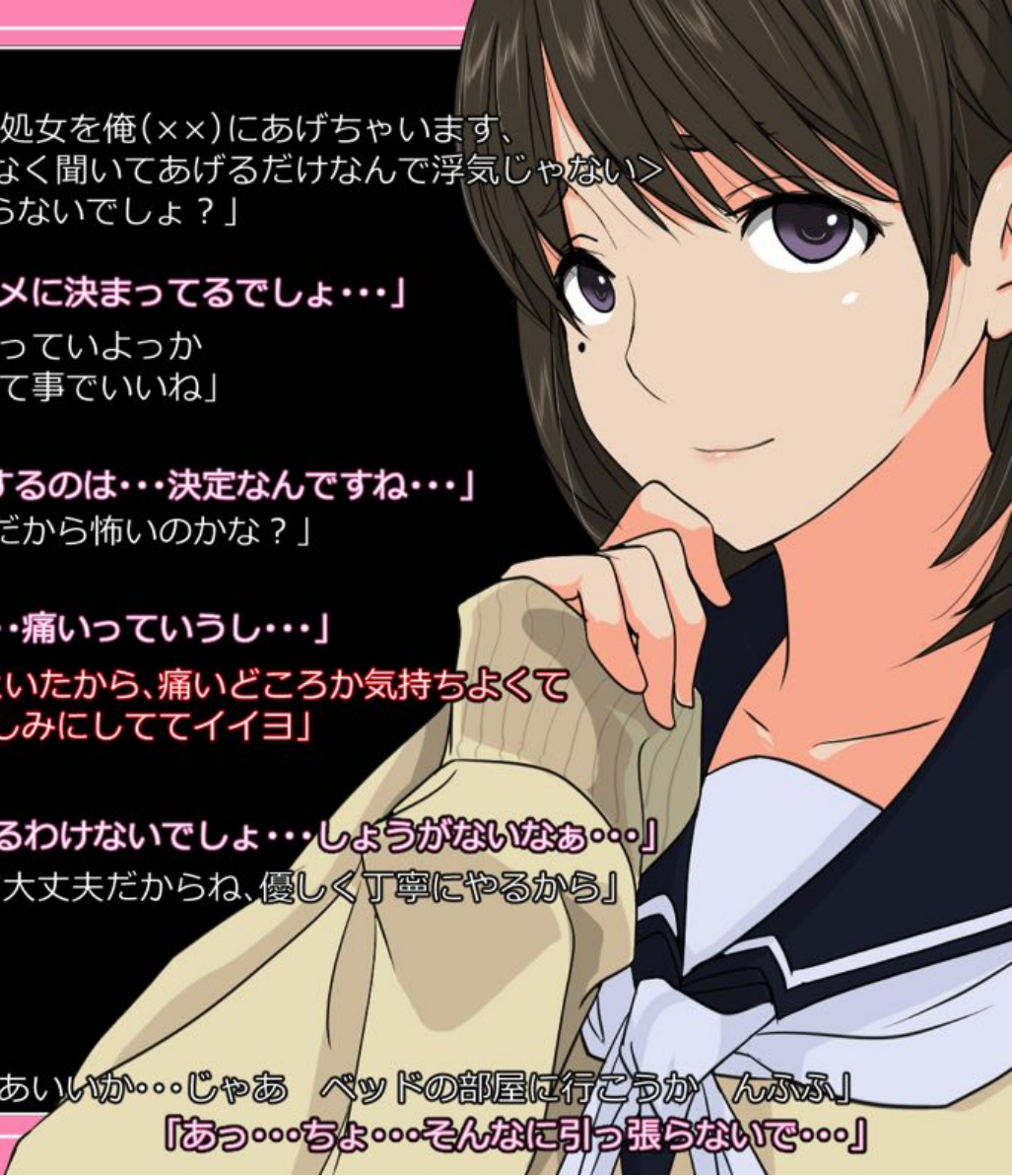
「そ、そんな便利なおまじないあるわけないでしょ…しょうがないなあ…」

「嘘じゃないって 怖がらなくて大丈夫だからね、優しく丁寧にやるから」

「はいはい…」

「なんか信じてない感じだけどまあいいか…じゃあ ベッドの部屋に行こうか んがふ」

「あっ…ちょ…そんなに引っ張らないで…」



丁寧にベッドに寝かされ 股を開かされる寧々

「んふふ～ いい眺め…  
(速攻お股をいじくり回したいけど  
すこしがまんしよっと)」

「これは…恥ずかしいですね…」

「恥ずかしいんだ？ふふっ…今 寧々ちゃんの  
大事なところじっくり見てるよ～ ん？なんか  
ふわっと お股から エッチな匂いがするよな…」

「やだ…もうっ…」

「あ…寧々ちゃんがお股見せ付けてくるから  
もうおち○ちん固くなってきちゃった…」

「もうっ あなたがさせてるんでしょ…」

「どれどれ 乳首が変な味しないか確かしてみようかな」

「へ、変な味?…んっ…あの…んっ…どうですか?」

「ん? もうちょっとなめてみないと…あと  
こうやってそばにやってみると…寧々ちゃんは…」

「な、なに?」

「すごい良い匂いがする」

「………」

「寧々ちゃん」

「は、はい」

「おいしい…もっとなめさせて」

「んっ…あっ…ちょ…ちょっと もうそのへんで…  
なんか…あっ…はあっ…」

「ん～ お乳が出てこないな～ ふふ」

「で…出るわけないでしょう…」



「ふむ、おっぱいからお汁は出なかったけど  
こっちはどうかなあ〜」

「んっ…」

「どれどれ〜」

「んっ…んっ…」

「どこが気持ちいいのかなあ〜」

「んんっ…んんっ…」

「ここかなあ〜」

「あっ…」

「新しいの買ってあげるから  
ストッキング破いていい？」

「え？あ、ま、まあ…い、いいですけど…」

「あれ?なんか もう めるっとしてるよ  
エッチな気分になってきちゃった?」

「べ、別に...そういうわけでは...んっ...」

「そう?じゃあ エッチな気分になるまで  
何時間でもグニグニするね」

「そ、そんなに...念入りに...しなくても...あっ♡」





そ、そんな...音...たてないで...はずかしい...

あ、あ、あ

うん

うん

あ、あ、あ

うん

あ、あ、あ

うん

あ、あ、あ

うん

あ、あ、あ

うん

あ、あ、あ

うん

あ、あ、あ


うん

あ、あ、あ

うん

あ、あ、あ

うん



「おち○ちん こんなに近くで見たの初めて？」

「ま、まあ…そうですね…」

「どう？」

「え？どうって…聞かれても…」

「これを寧々ちゃんの オマ○コの中にずっぽり入れちゃうからね」

「大丈夫ですかね…な、なんか…想像してたより…だいぶ大きい気が…」

「大丈夫大丈夫 もうネッチョネチョになってるし ゆっくり入れていくからね」

「それじゃあ そろそろ 俺とひとしじいになろうか…  
ほらほら足を閉じようとしちゃだめだよ パツカリ開いて」

「あのっ…でも…やっぱり  
初めては…好きな人と…が」

「え…好きな人って〇〇君の事？

あ、俺の事かな」

「〇〇さん」

「俺じゃないのか…でも俺は

寧々ちゃんの初めての男になりたいから  
このままおち〇ちん挿入しちゃうね」

「えっ！ちよっ…そ、それと避妊具は？」

「せつかくの俺と寧々ちゃんの初交尾なのに  
ゴムなんて不粋なモノつけないよ」

「不粋って…あっ…そんなっ…グシグシしたっ…あっ」

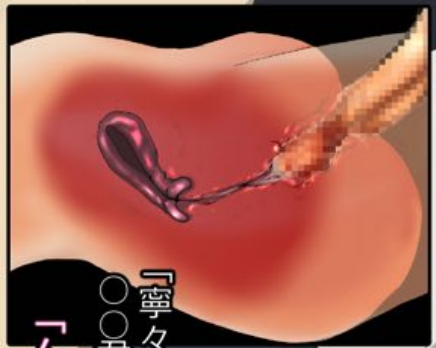
「あっ…寧々ちゃんのOKもってないのに入っちゃった…」  
「んっ…んっ…んっ…」

「大丈夫?…このまま  
ゆっくりゆっくり挿入しよよ」

「まだ…SSSS…MM…んっ…」

「寧々ちゃんの初めての男は俺だからね  
〇〇君じゃなく俺ね」

「んっ…んっ…」



「ああ、奥まで入ったよ……ね、そんなに痛くないでしょ」

「はぁ……はぁ……」

「直ぐに慣れて気持ちよくなるからね」  
「アハハハハハハハハハハ」

「はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……」

「んっ、そんなら動いて  
だいじょうぶかなあ」

「はっ……はっ……はっ……はっ……はっ……はっ……」



たっぷり じっくりオマ○をかき回される事々  
すでに挿入時の痛みは消え 快感に身を振じらせる

んんん

んん

「オマ○の中に出していいよねっ  
俺の精液っ オマ○にだすよ...お」

「...んあ...だ...だ...めえ...」

「ああっ...出る...せう出せっ」

「だ...だめっ...だめえ...だが...らあ...」

んんん

んんん

ぬんぬん

んん



寧々の許可をもらわないまま ××は寧々の膣内に射精する





強く抗えない寧々は 膣内に再び精液を注入される

寧々の大切な子宮は中年の精液で満たされる





××はゆっくり××名残惜しむつて  
率々の膣内からち○ぽを引き抜く

「……うん……うん」

まだやりたいけど……今回は  
これくらいでしようか……



「でもすっごく気持ちよくなってるみたいじゃない？」

「ん…まあまあ…その辺はいい…」

「それだ、そんな簡単な妊娠しないよ」

「むしろ心配なのは「ワンツー」が出来るから、飲むと「イイヨ」

「…今度はおっぱいをしゃべってみたいわ」

「今度はどうして？また俺とセックスしてくれるの？」

「えっ…あつ…その辺の事じゃなくて…その…えっ…  
女性側の気持ちも尊重してねって事です」

「その通りだね…ごめんね…反省したから、またセックスしてね」

「うん、それはお約束できません、今回だけ特別だと思ってください」



xxのお願い/命令に素直に(多少の反発はある)従うようにされちゃっている寧々

なんかおかしいなあ と思いつつも とにかく彼氏の〇〇君に  
内緒にしておけば大丈夫と思わされているようだ

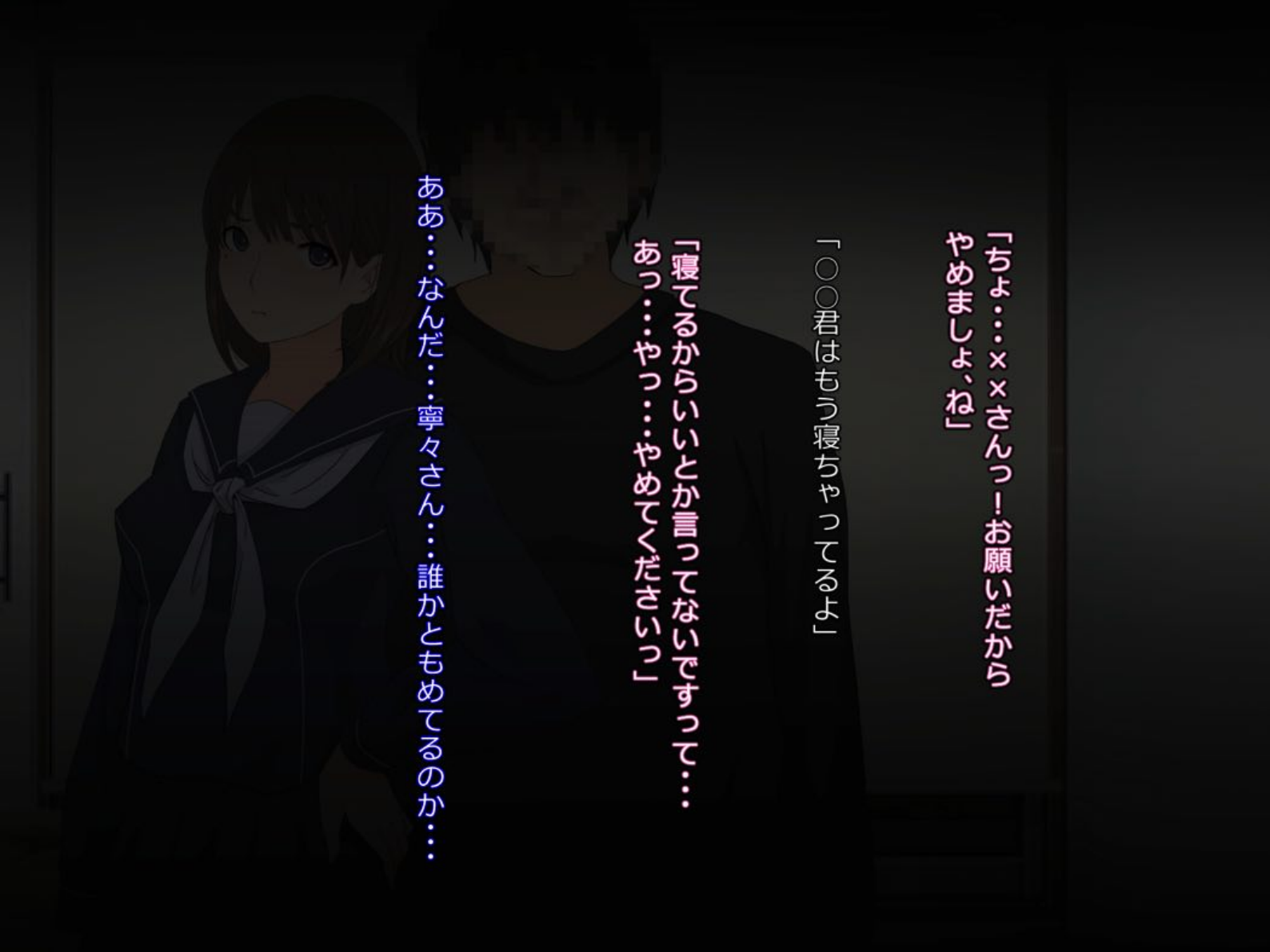
ふう〜…なんか変な夢みちまったなあ〜

あの××とかいうおっさんが寧々さんに馴れ馴れしくしてっから…気になってんだろうか…  
なんかあんまり寝た気がしないし…

しかし…やたらリアルな夢だったな…

○○君は その夢とやらを思い出してみる





「ちょ…x xさんっ！お願いだから  
やめましょ、ね」

「○○君はもう寝ちゃってるよ」

「寝てるからいいと言っていないですって…  
あっ…やっ…やめてくださいっ」

ああ…なんだ…寧々さん…誰かともめてるのか…

んんっ…寧々さん？…今度は…何してんだ？

「ちよ…ちよっど…そ、そんなに…あっ…んあっ…」

「ちよっと弄っただけでべちゃべちゃになっちゃったよ」

「あめい…」

「俺がプレゼントしたエッチなストッキング穿いてきて、寧々ちゃんも実はセックスする気だったんじゃないの？」

「ち、ちがいます…別にそういうわけじゃ…」

「ふふふ じゃあ  
ご期待に添えて  
おちん○ん挿入と  
いきますか」

「だ、だめですって…  
××…さんっ…  
んんっ…んんっ…」



「ほら、寧々ちゃんの  
マ〇はこんな  
ひくひくして喜んでるじゃ

「はああ...あ...ああ...うっめ

「やっぱり寧々ちゃんのオマ〇  
熱くて気持ちよくて...  
おちん〇ん溶けちゃうぞう

「だ、だめ...〇〇君が  
NEWSNEWS...」

「寝てるから大丈夫だよ  
いないのと同じだって  
それにオマ〇を  
ぎゅうぎゅう締め付け  
ながら言っても説得力  
ないよお」

ん...ね、寧々さん...な、に...してるの...ああ...頭が...ぼ~っとして...



再び〇〇の意識は薄くなる始める...

おぼろげな  
意識  
薄くなる

「x...x...」

「...」

「いんげん ちゃん  
いんげんちゃん」

2人の話し声もほとんど聞こえなくなる



あーん  
あーん  
あ

また意識が少し戻ると  
2人はほぼ全裸で抱き合い  
唇を重ねて唾液を吸いあっていた  
シートには何度もイカされた  
寧々から吹き出た潮で  
ぐっしよりと染みが出来ていた

「ん…ん…ん…」

「ん、んっあはあ…  
だ、ダメえ…××さん…  
〇〇君が起きてるっ…」

「大丈夫、ぼくッとして  
何もわかってないよ」

そう言うと二人は  
再び唇を重ね合わせ  
唾液を交換する

「んっ…んっんっ…」







またしても××に膣内射精をゆるしてしまう寧々  
ゆっくりと深く染み渡るような快感を与えられて  
満たされていた

しかし  
満足感と幸福感で



××に犯され ぐったりしている寧々を  
意識が混濁した状態で見つめる〇〇君



「こ、これ…大丈夫なんですか？…彼…起きてるんじゃ…」

「大丈夫だよ 夢か何かだと思っはうはずだから」

「おはよう、とおしたの、ムスカシイ顔して」

「え？ああ…寧々さん おはよう…あ、まあ ちょっと嫌な夢を見た気がしてさ…」

「え！ど、どんな夢なのかな…」

あんな内容の言えるわけない…

「えっと…実はあんまり覚えてないんだよね…  
漠然と嫌な感じってことしか…」

「そう…あるよねそういうの、あんまり気にならないほうがいいよ、  
もし怖い夢だったらお姉さんが手を握って寝てあげようか？」

「からかわならぬよ〜」

「ふふふっ」



当然だが夢ではない

---

催眠で意識が朦朧とする中で見せつけられたのだが  
目覚めたときに自宅のベッドだったので 夢だという結論に至っただけ

---

バイトの休憩時間に押しかけ  
おちん○んを寧々に舐めさせる

「いや、休憩中に悪いね」

「ホントですかよ…誰か来たの  
Anpanmanですか…」

「その時 ヤバイのは  
全裸の俺の方だから  
いらしゃん はははは」

寧々は周囲を気にするが  
××は見回れたり  
記憶を消せばいらすと  
思ってるので  
余裕で全裸になってる



「うあゝ気持ちーよ寧々ちゃん…  
こんなにおしゃぶり上手な彼女が  
いるなんて〇〇君が羨ましいよ…」

「んっ…んっ…んっ…んっ…」

「その制服カワイイね  
…でも寧々ちゃんの  
大きなお尻がちょっと  
まじっすっ…」

「んっ…んっ…」

「んっ…んっ…んっ…んっ…  
んっ…」

「んっ…んっ…んっ…んっ…」



んっ…んっ…んっ…んっ…  
んっ…んっ…んっ…んっ…

「ね、寧々ちゃん…R…ちゃん…制服汚れちゃうし…はな…お口…」

「んん」

「一言どおり寧々の口に精液を吐き出す…寧々は大量の精液を必死で口内に納めようとするが、溢れ出して…」

「んん…んん…んん…」



寧々は××の精液を口内に  
含んだまま命令を待っている



「よく味わって」

「んんっ…」

「おさくさくごよめ？」

「んんっ」



「じゃあ飲み込んで」

「んんっ…」

ぐん

「ヨシヨシ いい子だね、次はおちん○んを  
へろへろしてお掃除してね」

「……んっ……は、はっ」

「そりゃあ、垂れた精液も全部綺麗になめてね。俺の精液はみんな寧々ちゃんのモノだからね。」

「今日は彼氏君はシフトに入っていないの？」

「入ってたらこんな事してあげませんよ…たぶん気になって見て来るから。」

「お、お、お、お、お、お。」





尿道に精液が残らないよう  
強くだが丁寧に吸い付く

ちゅぽんぽんぽんぽんぽん

「うあ……それやばい……」

「えー痛かった？めんなやら」

「いやいや、寧々ちゃん休憩時間なのにまた出すまで  
しゃぶってもらいたくなっちゃうから……ちゃんと休まないかね」

「ふふっ 意外と優しいんですね」

「あれ やつと気づいてくれた？」

「いや……気のせいでした」

「えく……俺のことが好きになっただって流れだと思ったのに」

「だめです、私は○○君のモノなのです」

「妬けるなあ、 ああ ○○君が羨ましい」

寧々が上手におちん○んをしゃぶれる事も  
××のきったないザーメンを抵抗なくゴックンしている事も  
○○は今だに知らない

とある飲み屋、同じ能力を持つ仲間△△と××は会っていた

××「へ～お前の女の子もカワイイな～」

△△「××さんの気持ちよさそっすね～、やっぱ付き合ってる男いたんですか？」

「まあな、このレベルの女は超高確率で男がくっついてるからな」

「ま、そうですよね」くん

「それと<いた>じゃなく<いる>だよ、最後まで別れさせるつもりはないよ」

「うあ～ **相変わらず外道っすね**」

「そんな事ないだろ～彼らの関係を壊さないんだから、まあ人のモノを弄くり回す  
るのが好きなだけともいえるが」

「**彼氏さんかわいそう・・・**」

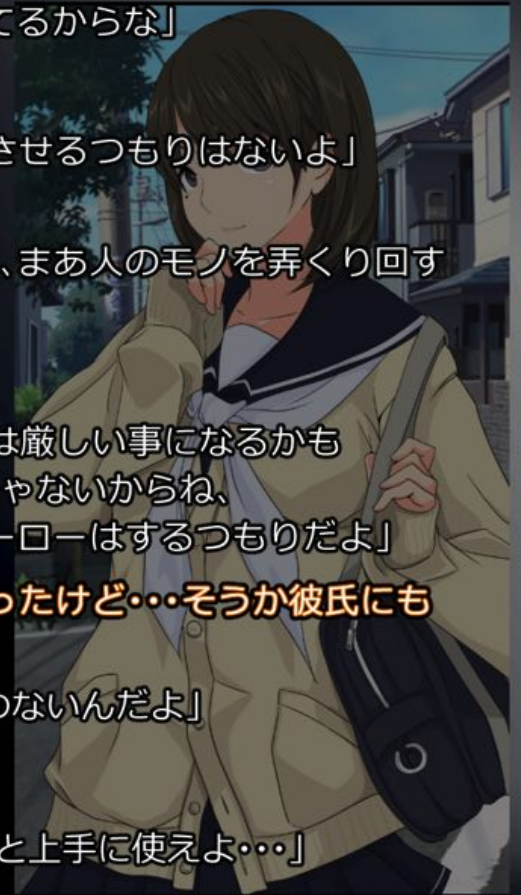
「お前は人の事いえないだろが・・・ま、まあ彼氏君には厳しい事になるかもしれないけど・・・でも別に彼らを不幸にしたいわけじゃないからね、  
たとえば妊娠しちゃったりしたら環境や金銭のフォローはするつもりだよ」

「へ～、俺は別れさせて飽きたら捨てちゃうつもりだったけど・・・そうか彼氏にも  
**催眠洗脳して押し付けちゃえばいいのかあ**」

「嫌な言い方だなあ・・・押し付けるんじゃないの・・・奪わないんだよ」

「**モノは言いようですね・・・**」

「飽きたら捨てるとかダメだぞ、もらった<カ>をもっと上手に使えよ・・・」



「ふう～xxさんの話を聞いてたらマ○コに入れたくなってきた…」

凜子に電話する△△

「…ん?なに?」

「マ○コするぞお～」

「…いきなりバカじゃないの、何?酔ってるの?」

「酔ってないよ、凜子お～ 凜子のマ○コ  
なめたいよお～」

「ふう～…今 やる事あるの、切るよ」

「俺の部屋で待ってるからなあ～…待ってるぞお」

「しらんっ…、じゃあね」



「電話であんなにそっけなかったのに、ホントは凜子もセックスしたかったんじゃないの？」

「はあ？酔っぱらいおやじの相手をしてあげてるんだから…余計な事言わないでくれる…」

「なんかやる事あって忙しかったんじゃないの？」

「電話のあとすぐに終わらせたの」

「ふん、まあいいや それよりさ そろそろ生でセックスさせてくれよ」

「バカじゃないの…ダメに決まっているじゃん」

「凜子の子宮に俺の精液がびゅーびゅー注入されること想像してみなよ ソクソクするだろ？」

「…べっ…別に…ソクソクなんてしないっ…」

「大きくなったお腹をなでなでしたいなあ」

「はあ??アンタの子供なんて絶・対・イヤ」

つながったまま小休止 お話中の2人

「話し変わるけどさ 彼氏君には凜子が処女喪失  
しちゃったって事 もう教えてあげたの？」

「バカでしょ……言……う……わ……け……ない」

「じゃあ こうして凜子が俺と浮気セックス  
してる事も知らないんだあゝ」

「……あたりまえ」

「うん」

「……いいわけないじゃん………  
なに？言う事聞かないから イジワルしてんぞ」

「ちがうよ、単に気になっただけ」

「もう いいでしょ……はやくイかせてよ」

「わかったわかった」



「んっ…んあっ…あっ♡」

「いつちやった?」

「はあ…はあ…ん…まあね…そうちも  
イけたの?」

「ん?ああ まあゴムの中じゃあんまり満足感ないけどね」  
「4回も出しといてよく言うよ……」  
「もう…そんなに生でしたいの?」

「何?中出し解禁してくれんの」

「彼氏でもないのに調子に乗りすぎなんだけど……  
まあ…考えとく……」



寧々、凜子と同じように愛花も催眠術のハ餌食Vになってしまっていた。三人目のおじさん□□も工夫を凝らしてリア充カップルを弄んで楽しんでいるようだ

「愛花様〜こんなとこ彼氏さんに見られちゃったら誤解されちゃうんじゃないんですか？」

「そんな心配をあなたがする必要はないの」

「^^^^ それならいいんですけどね」

「ほら もたもたしてないでさっさとあなたの汚い部屋に案内しなさい」

「あ、はら」

愛花は□□の事を奴隷とか 言う事を聞けばいいとか 女王様気分で言ってくるが 実質□□のやってほしいことをやらされているだけ





「今日は「レ」を私のアン」に突っ込んでもらうから」

「えー！それってセックスするって事…  
それは彼氏さんの仕事なんじゃ…」

「その彼氏様からの指示なの  
あなたみたいな冴えないおじさんの部屋で  
床にダンボールを敷いて  
その上で最低の処女喪失をしてこいって」

「あ…ああ、そ、そういうことなら…」

「違うでしょ、^私のおちん〇んを愛花様に  
捧げますVでしょ」

「さ、捧げます 愛花様に私のおちん〇んを  
捧げます」



「それじゃあ、奉仕の時間よ……」

「あ、あの……本当にいいんですか？」

「はい、決まっていますよ」

「彼がそうしていいから」

「言ってるんだから」

「それじゃあ、その縄で私の事を縛りなれよ」



「んっ…な、なかなか縛るの上手じゃない…いい感じよ」

「初めてなのに…いきなりこんなハードな感じでいいのかな？」

「もうっ！何度も言わせないで、彼の指示なの、あなたは私の命令に従ってほしいの！わかった？」

「す、すいません へへへ」



「それじゃあ 私が泣いても失神しても膣内に3回射精するまで犯すのをやめたりダメよ」

「3回…でも中出しなんてしたら妊娠しちゃうかも…」

「それが彼からの命令なのっ！いいから膣内に射精するのっ！わね」

「わ、わかりました…」

愛花は次に口をテープで塞げと指示をした

「じゃあ あとは俺の好きなように犯してらっしゃるんですか？」

「んむっ」

「愛花様は肉便器志願の変態マゾなんですか？」



「んせっ…んんほんぶ…むぶ…っ」

「ち、違うんですね…」

「んせっ」

「ひょ、了解です…じゃあオマ○」い、いただきます

「んせっ」

あっさり処女を奪い 痛みを感じているであろう愛花の膣内をごねくり回す口口

「大丈夫ですかあ 愛花様あ〜 まだ 中出ししてないのにもう  
ガクガクしてますけど? ねえっ」

「ぶぼっお...おおお...」

「ほらほら〜マ〇コ壊す勢いでいきますよお」

「んふうーっ! んふううう...っ!!」



「ああ・・・出そう・・・愛花様・・・出しますよ・・・愛花様の新品マ○コに  
俺のくっさいザーメン・・・んおっ・・・」

「んんっ————っ！！！！」

「ふう～きもちいい……………ホントによかったんですか～  
俺の精液でオマ○コ汚染しちゃって」

「ふうう……ふうう……………ふ～……」

「まあ今更言っても意味ないか……じゃあ後 二発だしますね～」

「ん？……んんっ……んん……」

「あ～ なんか出てますよ～愛花様・・・大洪水だ はははっ」

「んお・・・んぶう・・・・ん むぶう・・・」







「あらら…なんかリアクションが薄くなっちゃったぞ…」

「……………ん……………お……………」

「お～い 愛花さまあ～…大丈夫ですかあ～」



「アイマスク取りますよ…あら～ すごい顔…  
なんか限界っぽいけど、あと少しで3発目出ますからね～」

「…………お…………」

「なんか大きなオナホールみたいですよお  
愛花さま はははっ」





「ふ〜…約束の3発目ですよ〜 お〜い 愛花さまあ〜」

「……………あ……………う……………」

「ほらっ…ドクドク注入されてるのわかりますかあ〜？」

「喜んでください、愛花さまの新品マ○コの  
具合がいいからまだまだ出せそうですよ」

「顔も俺のザーメンで汚しておきましたからね」



そして気絶するまで 愛花を犯し続けた...

「M君…わたし ちゃんと汚いおじさんとセックスしてきたよ…」

「俺の言ったとおりにしてきたんだ、ちゃんと女王様みたいな態度とった？」

「うん それとちゃんと3回 中に射精させたよ」

「そう…ご苦労様 どうだった？苦しかった？」

「う～ん…全然平気だよ(まあ…すごかったけどね 途中からあんまり覚えてないし)」

「じゃあ そのおじさんとまたイロイロしてきてほしいって言ったらどうする？」

「あなたが そうしろって言うなら………してくる」

彼氏のM君は □□に催眠洗脳されていて  
□□の指示を代弁している人形にすぎない

そして愛花はM君の命令には絶対服従し  
それに喜びを感じるようにされちゃってます

「今日も××さんのように行くの〜」

「え？…うん…」

「結構頻繁にへお願い〜とやらを  
してくるんだねあの人…」

「そっだね〜」

「寧々さんが甘い顔するから調子に乗っちゃうんだよ…」

「そうなのかな…ふふっ とうじたのっヤキモチやらちゃった〜」

ハッキリ言わなければ  
ばれることは無いと  
思っている

〇〇君は寧々が××に何度も  
会っていることは  
すでに知られてしまます

「べべっ」 そうじゃないけど……  
あ、あのさ…お願いって…つけやね…うとな事ってなの〜」

「ん？ん？…えっと、まあ たいした事ない…こと かな」

「…たいした事じゃない…ね…」

「ん？」

「さや…なんでもさな」

はあ〜…行っちゃった…

あ〜怖くて あれ以上じつごく聞けなかった…

でも…心配してる様なことが本当にあったら…  
俺 どうするんだ？

やだぞやだぞ…寧々さんと別れるなんて…  
ぜったい別れたりしないんだからな

このように薄々感じているんですが  
〇〇は寧々が 別れたいと言ったり 寧々に拒絶されない限り  
どんな事になっていようが それを目の前で見せられようが  
絶対に寧々を手放そうとは思わないようにされています  
心配や嫉妬はしますが幻滅は絶対にしません

「あの、××さん…今日はやたら〇〇君が心配してる様子  
だったんだけど…彼に何が言いました？」

「えっ！な、なんでそう思ったの？」

「ん…なんとなく」

「言わないよ、だって彼にナイショにする約束だから  
寧々ちゃんが「うらうら」としてくれてるんだし」

「…すみません…」

「そうだよ、寧々ちゃんが今みたいな格好で  
調教されちゃってるなんて知ったら、もう  
寧々ちゃんを貸してくれなくなっちゃうよ」

「ん…やっぱり気のせいだったのかなあ…」





「俺はキミ達の関係を壊したくないし、寧々ちゃんにおちん○ん舐めてもらったり、オマ○コに入れたりしたいから余計な事はしないよ、信じて」

「うん、そうですよね わかりました」

「よかった…あ、そうだ 今日オマ○コにだしていい？」

「ええ、いいよ、どうぞ」

「おねがい」



「ん、低容量ピルを使わせてくれれば 私も安心なんだけどなあ」

「そんなの使わなくても今まで妊娠しなかったでしよ？」

「そりゃ今まではそうですけど…これから大丈夫って事ではな〜どしよ〜」

「ねえねえ そのうちさ〜 危険日に〇〇君に見てもらいながら  
生でセックスしてみようよ、それで彼の目の前で受精といこうよ」

「んんん 調子にのっちゃう だめですよお」

「ふふっ まあそれは冗談だけど  
ホントに2人の子供ほしいんだけどなあ〜」

「…そんなに私のこと好きなの？」

「好き、マジで愛してる」

「ふふっ♡でもいめんさいい…そんなことしたら  
〇〇君との関係が壊れちゃうじゃないっ」

「その点はもちろんいい方法を考えてあるんだけどなあ」

「ふふっ とにかく ダメですよ…でもそんなに」

「愛してくれるなんて、悪い気はしないなあ」



「寧々ちゃん…」

「んっ…あっ♡…ん？なに」

「寧々ちゃんの蒸れた腋からいい匂いしてくる」

「わっ…汗臭いけど…だめでしょ」

あ♡♡

ん♡♡

ほ♡♡

「汗臭いけど 俺の好きな匂い  
メチャクチャ興奮する…」

ほ♡♡

あ♡♡

ん♡♡

「せうっ…変態さんだからあ」

「他の女のはイヤだよ、寧々ちゃんのだからだよっ」

「んっ…あっ♡」

あ♡♡ あ♡♡ あ♡♡ あ♡♡

「寧々ちゃんの オマ○」…キモチいいよ…」

「あっ♡…あっ♡…わ、私も…キモチいい…あなたの  
おちん○ん…キモチいい…んはっ…あっ♡」

あ♡♡

ん♡♡

ほあ♡♡

びんっ

んっ

あ♡♡

ほあ♡

あ♡♡

ん♡

んっ  
んっ  
んっ

ぬち

ぬち

ぬち

ぬち ぽん

「顔に出すよ…綺麗な顔を俺の汚い精液で  
汚すよ」

「あっ♡…あっ♡…顔に…かけてっ…」



「はぁ...はぁ...ナカに挿すんじゃないの?」

はぁ...

はぁ...

はぁ...!

「大丈夫 一発で終わるわけないでしょ  
ちゃんとオマ○ロのナカにぶちまけるよ」

汗と精液を丁寧に拭いてあげてインフアーに固定する

「ふっ」「ミンミン」  
いい眺め、ん？  
どうしたの？」

「な、なんか こんな格好で  
固定されてると…  
恥ずかしくなってきたちゃって」

「ははっ なんて？寧々ちゃんの  
マ○は何度もじっくり見てるし  
味も匂いも知ってる男だよ俺は」

「ネーどおぢい…」

「でも、恥じらいがあるのは  
すっごくポイント高いよ」



「んふふふ じゃあじつくり眺めて  
味と匂いをたしかめちやおうくへふふ」

「んーこれは…クサいっ！それになんてエロい味なんだ…  
それにヒクヒクしておちん○んを欲しそうにってる…  
これはヒドイな…」

「…SADANE…」

「ねえねえ 写真撮って○○君に  
送ってみよっか？」

「えっ！だ、ダメっ…！」

「えゝ 俺のおちん○んを欲しがってる  
オマ○」を彼に見せてあげなよゝ」

「ポイントやめてくだわらっ…」

「ゴメンゴメン うそだよ…冗談」

「んせひひひひひの井かたもめ」



「いじわるしてゴメンね…ナマのおちん○ん入れて  
いっぱい精液だから ゆるしてね」

「ふぁっ…あ…ああ…あっ♡」

「うあ～ やっぱ 寧々マ○コ きもち～」

オチンコ

おちんこ

「うあ…吸い付いてくる…」

「はあ…ああ…あ」



「あっ…あっ♡あっあっ…♡ あっあっ♡あっ…あっ…  
あっあっ…あっ♡んあっ…あっ♡」

「俺のおちん○ん きもちいい?」

「あっ♡…き、きもち…いい…  
きもちいい…あっ♡…」

す  
す  
す

う  
う  
う

す  
す  
す

「俺のおちん○ん好き?」

「う、うん…す、すきっ…  
おちん○ん…すきッ」

あ  
あ  
ん  
あ  
あ



「んおあ…マ○コに出しちゃうよっ いいよね？」

「あっ…あ、いっ…いいよっ…マ○コに…だ、だしてっ」

「んあぁ…あ～ ふう～～～きもち～……」

「あ…あっ…あぁっ…♡…あぁ～」

「あ…あぁっ…まだ ビクビクしてる…  
はぁぁ…いっぱい…ナカに…あっ♡」



「ふう〜やっぱ寧々ちゃんど、セックスするとメチャクチャでるなあ」

「はあ…はあ…はあ…はあ…  
す〜量…」

「寧々ちゃん」

「なあ〜?」

はあ  
はあ

はあ  
はあ

「寧々ちゃんの事が好きすぎて  
勃起がおさまらない…  
もう一回 オマ◯◯に入れて〜?」

「……♡♡♡♡」

この後 ××が満足するまで何回も膈内で精液を受けとめた



「満足しました？」

「まあね・・・でも寧々ちゃんとなら  
まだまだ出そうと思えば出せるよ」

「あれだけ出せば十分でしょお・・・もう～  
私の方が 壊れちゃう」

「大事な寧々ちゃんが壊れちゃこまるな・・・  
じゃ、デザートにおっぱい吸わせて～」

「ふふっ どうぞ」



「寧々ちゃん…好き」 「もう何度も聞いたよ ふふっ」

「冗談じゃなく 本気でなんだけどな〜」

「わかった わかった」

「彼と別れて俺のモノになって…」

「……もう…困らせないで…」

「俺のこと嫌い？」

「…きれいじゃないけど…」

「おっぱい好きなだけ 吸っていいから  
…今はそれで我慢して」

「コレ 俺専用のおっぱい？」

「ん〜 赤ちゃんが産まれたら共有かな ふふっ」

「出しまくったから・・・眠くなってきちゃった・・・」

「お～ヨシヨシ・・・朝までそばにいてあげる♡  
安心して寝んねしていいよ」



寧々の体温 匂い おっぱいの感触に包まれながら  
至上の眠りを貪る××

放課後 寧々と〇〇は一緒にごくごかて過すそと話を  
しているときに……x xの邪魔(電話)が入る

「えっうん…うん…でも…今は〇〇君とですね…えっ！  
そうなんですか…うん……わかりました…」

「なに??どうしたの…」

「うくん なんか急用があるんだって…急いで来てほしいって  
切羽詰った感じだった…」

「えっ……じゃ、じゃあ行くの？」

「うん…」「メン…せっか、一緒に行くつもりだったの  
……なにが…怒って…」

「……うん、お、怒ってなら別だ」

「す、すん終らせて 〇〇君の部屋に行くから…も、も  
遅くなりそうだったから電話するから」  
「……うん…」



「急用って何があったんですか？」

「急に寧々ちゃんのおっぱいが吸いたくなくなってね」

「はー????」

「あと寧々ちゃんの匂いを嗅ぎながら射精したくなって」

「……もう……なにそれ……彼がすく不機嫌になっちゃったので無理して飛んできたの……」

「へえ、彼が不機嫌に……それは悪い事したなあ 今度謝っておかなきや へキミの大事な彼女を妊娠させてごめんなさい」

「うん、だめじゃあ」

「へへへ冗談、それよりさ 早く、おっぱい！おっぱい吸わせて」

「もう……赤ちゃんじゃないんだから……シャワーは無いから……」

「……シャワーなんて」

「…… はらばら じゃあ部屋に行きまじや」

◎◎は寧々のおっぱいを堪能した

「おっぱいもういいの？もっとちゅっちゅしないの？」

「うん、ひとまず満足したよ」

「ふふっ それじゃあ 今度は  
せ〜しピュッピュしましょうか」

「するする」





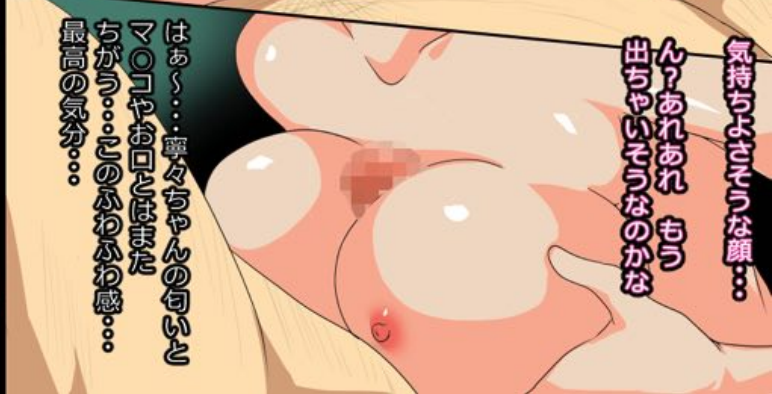
わっ……すっ……

どっ  
おちんちん



ふふっ おちんちん  
硬くて熱い……

ふわふわで……あぁ……  
しあわせえ……



気持ちよそつな顔……  
ん？あれあれ もう  
出ちゃいそつなのかな

はぁ……時々さくの白く  
くっつく感じが最高……  
最高の気分……



「うふふっ すご〜い…噴水みたい」

「だってすげ〜気持ちよかったんだもん」

「それにしたってすごい なんか勢いも前より凄くなってる気がする」

「だって 寧々ちゃんがそばにいてだけで嬉しいからさあ〜」

「え…」

「好きで好きで愛してる人にパイズリされれば 勢いも増すよ」

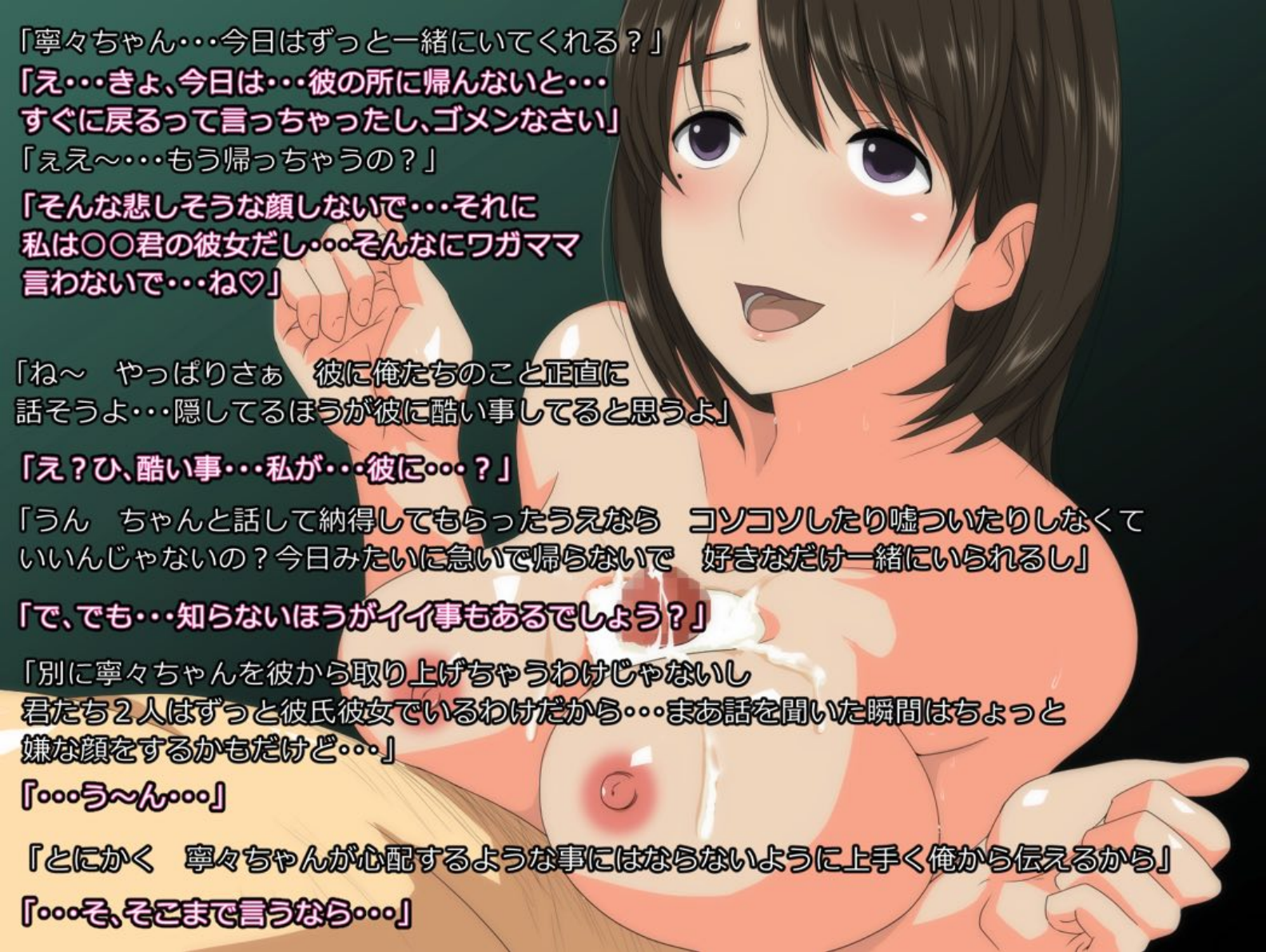
「ま、また そんな事 言って〜」

「……」

「ちょ、ちょっと 黙らないでくださいよ…」

「本気にしてくれていいからね…俺が愛してるって事」

「……」



「寧々ちゃん…今日はずっと一緒にいてくれる？」

「え…きよ、今日は…彼の所に帰らないと…  
すぐに戻るって言っちゃったし、ゴメンなさい」

「ええ～…もう帰っちゃうの？」

「そんな悲しそうな顔しないで…それに  
私は〇〇君の彼女だし…そんなにワガママ  
言わないで…ね♡」

「ね～ やっぱりさあ 彼に俺たちのこと正直に  
話そうよ…隠してるほうが彼に酷い事してると思うよ」

「え？ひ、酷い事…私が…彼に…？」

「うん ちゃんと話して納得してもらったうえなら コソコソしたり嘘ついたりしないで  
いいんじゃないの？今日みたいに急いで帰らないで 好きなだけ一緒にいられるし」

「で、でも…知らないほうがイイ事もあるでしょう？」

「別に寧々ちゃんを彼から取り上げちゃうわけじゃないし  
君たち2人はずっと彼氏彼女でいるわけだから…まあ話を聞いた瞬間はちょっと  
嫌な顔をするかもだけど…」

「…う～ん…」

「とにかく 寧々ちゃんが心配するような事にはならないように上手く俺から伝えるから」

「…そ、そこまで言うなら…」

というわけで ○○に今までの事やこれからどうなるのかを伝える××  
当然だが催眠済みの○○はキレたり別れるとわめいたりもしない  
きつつい事実立ちくらみするくらい

「な、なんとなく…そんな事になっているんじゃないかと思ってましたよ…」

「で、どうする？ 寧々ちゃんは君が一番好きで別れたくはないって言うけど？  
俺は彼女のこと愛してるから君が捨てるって言うなら俺がもらうけど」

「別れるわけないでしょ！…ぜ、絶対に別れませんよ！俺だって愛してるんだから  
あ、アンタには渡さないっ…」

「そっか～ ちょっと残念だけど 安心もしたな」

「は？」

「君が別れるなんていったら寧々ちゃんが悲しんじゃうからね、君らの関係を壊さないって  
約束だったし。でも君も器の大きな男だね～、普通だったらガチで切れたり別れたり  
するのに…さすが寧々ちゃんが惚れた男って感じだな」

「別にそんなことないです…ぶっちゃけ悔しくておかしくなりそうなんですから」

「ま、それがあたりまえだよ、何も感じなかったら好きじゃないってことだからね…  
まあとにかく これからは君にコソコソしないで堂々と寧々ちゃんと…んふふ  
頻繁に彼女を貸してもらうことになるけど、よろしくっ♪」

「くっ…」 「そんな顔しないで～仲良くいこうよ～ 同じ女を愛する者どうしさあ～」

××家からの帰り道 寧々がいる どうやら待っていたようだ

「あ……黙……り……じ……め……ん……な……ら……あ……の……そ……の……」

「寧々わん」 「ほい、ほい」

「俺、絶対別れないからねっ……あの人が寧々さんの事愛してるとか  
言っただけど、俺だってそうだから」

「〇〇君……ほんまに……トキメキ……」

「謝んならっよ、あの人のへお願い♡を聞いてあげてただけなんですよ」

「う……ん……そ……う……」

「寧々さんのそうらっう優しいところが好きだよ……まあ  
できれば俺だけに優しくしてほしいかったけど……」

「〇〇君……」

「これからは寧々さんに嘘つかせる必要ないから、よかったって  
喜んでたよ……あの人の……」

「……そ……そ……う……」

「ね、寧々さんもこれからは 俺を裏切つてるとか気に病むことは  
無しでいらっうよ、ねっ。俺も気にしないからさ……」

あっ、そうだ、次からは あの人と何したとかも教えてよ はははっ

「……」

このように ○○と寧々と××の関係は  
さらに異常なステージに進展した

○○は悔しさと悲しさと少しの怒り(興奮?)と困惑がごっちゃになっていた

寧々は胸の痛みと同時に安堵もしていた



「凜子の方から電話とか珍しいじゃん なに?」

「え?…なんか最近連絡ないからさ…どうしてんのかなって」

「どうもしてないけど…何?俺のち○ほ欲しくなった?」

「別に…そういうわけじゃないけど」

「ふくん、違うんだ…まあ 欲しがっても 生でセックスさせない女とはもうヤル気ないけどな」

「…ふんげふ…」

「は?何?なんて言ったの?」

「今日は生でも…いいけどって言ったの」

「ふくん…でも今日は俺が予定あんだよね…今日は彼氏君と楽しくすごしたらいいじゃん」

「あ…ふん…」

「あつこの夜なひ空にけるけど…」

「あつ、あつこの夜ね、わかった、行くから…  
行くから部屋にいてよ」



「なんか機嫌うらやま？」

「別にそんなことならけど、まめ…悪くはないかな」

「うらやまの？彼氏にナイショで俺と生でセックスしちゃって？」

「…あんまりよくなら…うてか…すぐへよくなら…」

「なのに 俺と浮気セックスしに 来ちゃったんだ？」

「…うん…」

「なんか妙に素直じゃん…らしくならない？」

「だって…電話のとき…すごく冷たい感じで…なんか…怖かったから…」

「そんな冷たい感じだった？あんどきちよつと」

「イロイロあってイラついたちゃってたんだよね…「メンメンメン」

「そっか…」



「あらかじめ聞いておくべきじゃね…中ほどにしゃう気じゃないよな？」

「は？なんで？当たり前じゃん、奥でびゅーびゅー出すよ」

「生セックスは  
いいけど…  
出すのは外に  
してくんない？」

「今日危ない日なの？」

「いや…今日は…  
大丈夫…っほい感じだけど…」

「そんな  
いいじゃん

「今日だけ…今日だからね」

「…んむ…」

「わかったわかった…できるだけそうするから」





「んはっ…あっ…やば…い、まっ また…イク…イクっ あっ♡」

「またイっちゃうの？早くない？」

「だって…あっ♡ きっ…きもちっ いい…か…らあっ…」

「奥まで突きちゃうぞ～」

「んああっ！あっ！あっ！あっ！！」



「はあ……はあ……はあ……」

「そろそろ俺も出すぞ～ 中に出しちゃうからな」

「はあ…はあ…な、中じゃなきゃ…ダメなの？」

「ダメ～ 凛子のま〇こに俺の精液の味を 覚えてもらわなきゃいけないからな」

「こ、今回だけだからね…ほんとに…今日だけだからね…」

「わかったわかった 顔見ながら出したいから こっちに向き直って…  
ああ…ほら早くこっち向いて もう精子出そうだから…」





「.....」

「.....」







「はいでしたっ」

「ん…まあ…すこかった…」

「じゃあ これからはパンパン中だしオツケー？」

「んっ そりゃうわけじゃならぬよ…やっぱ妊娠しちゃうの  
「アス…」

「いいじゃん別に妊娠したって」

「いいわけないでしょ…」

「俺の精子で大きくなったおなかを彼氏に見てもらおうぜっ」

「なに言ってるのっ 冗談はそのへんにしてよもっ」



思いっきり膣内に射精された凜子  
今日だけとは言ったものの 当然そんな事になるわけはなく  
△△の精液を注ぎまわれることになる  
凜子を孕ませる気100パーセントの△△は  
ピルの事などを凜子の認識から消し去っている

ちなみに凜子の彼は 彼女の変化にまったく気づかない催眠を  
施されている

「おっさんさん」

「20...おっさんさん」

「彼の命令じゃなきゃ あなたみたいな人に  
なめさせてあげないんだから...感謝してる」  
「くっく わかりました」

「ぶるっ 吸ってるみたい...あり...  
ん」を強く吸っちゃダメよ...  
「筆でお汗をくっくくくく」

「おっさん」

「NUN...NUN...20...  
SSHH」

あんな...  
ず...  
あ...  
あ...

あ...  
あ...  
あ...



「私のKAMONをな〜好きなの〜」

「んあっ好きですっ ずっと舐めてらるれたいっ」

「そう…じゃあもう少しだけお汁を飲ませてあげる…嬉しいっ〜」

「嬉し〜っ」

「ふふっ…素直な人は嫌いじゃないわ」

「ああ、そういえばあなたは私を妊娠させないといけなくなったから」

「えっ！妊娠…いいんですか？」

「私の彼がね、あなたに孕まされて無様にお腹を膨らませている私が見たいんだって だからそのお願いを叶えてあげるの」

「ま、マツですか…いくら大事な彼氏さんのおねがいだからって…」

「あなたは私の指示通りにすればいいの、一生懸命 私の中に射精しなさい、いいわね」

「わかりましたっ」

「いくらでも射精させていただきます」



「お、ムラカミ様は…お前さんの…お前さんの…」

「あ、別と違うんじゃないですか？！それとも…お前さん…何？」

「首輪です」

「はっ…お前さん、お前さん…  
今、お前さん…お前さん…」

「へへ…愛花様がよるこせられたら…」

「はっ…さうじゃないさ」

「縛られて喜んでたんで…お前さんのも好きなんじゃないかな〜と  
思ってます…へへへへ〜」

「はっ…ムラカミ様は…お前さん…お前さん…お前さん…」







「愛花様……もっ出せろっ……」  
□あけて……」

「んあ~~~~」





んんんん  
んんんん  
んんんん

ズンズンズン  
ズンズンズン  
ズンズンズン

「あーんはっ……んっ」

「……ん」

「はあ～…でるでる…」

「ん～…ん～…んう～………」





「ぶぶっ 量が多すぎ べれちゃったわ…それに臭くっておこしくなご」

「すいませんっへへっ…」

「まだ田舎なわね」

「えっ」

「まだまだ そのおち〇ちんから搾り出す汁を飲むなんて」

「おんちの汁を飲むなんて」

「んんん」

「おんちの汁を飲むなんて」





「……」

「……………」

「……」

「……」

「……」



「おお、愛花様は……もうもうと休みませんか？」

「んっ(たヌカ)」

「あ、あー」発出したわー」

「んっ」

「うー」発っ」

「んっ」

んっっ  
んっっ  
んっっ  
んっっ  
んっっ

んっっ  
んっっ

「……愛花様が満足するまでか？」

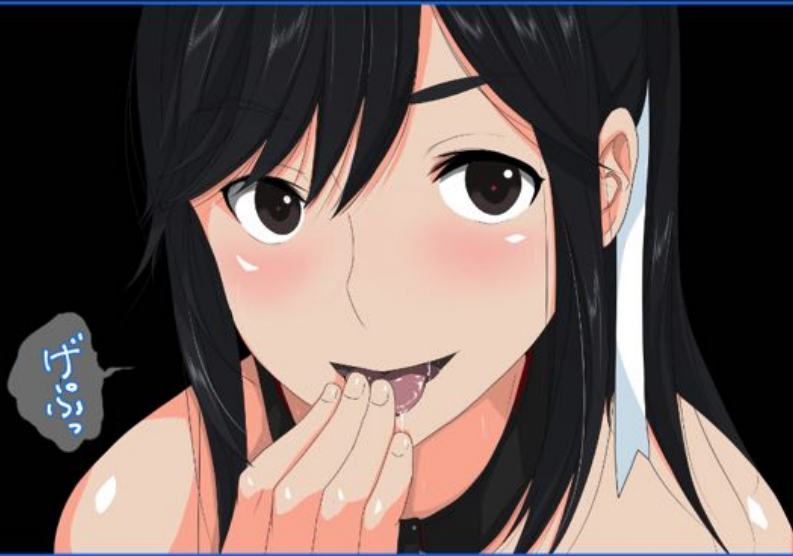
「んっ」

んっっ  
んっっ  
んっっ

自分のち○ぽに吸ら付くと離れなら愛花に少し驚く□□

□□はこの日 愛花のマ○コに出しまくるつもりだったが

□□のち○ぽに吸い付いた愛花にザーメンを搾り取られまくってしまった



□□は 愛花にフェラやザーメン大好きという催眠をかけてないので  
もともと彼女は淫乱でザーメン好きの変態だったようだ



「と言うわけで今日は〇〇君にも参加してもらおうことになったから、よろしくね」

「あの…わざわざ〇〇君に見せつけるような事…しなくてもいいんじゃないですか？」

「〇〇君は俺達がどんな風にセックスしてるのか気になってしょうがないんだよ、しっかりと近くで見てもらったほうがいいんだよ、ねえ〇〇君？」

「……そ、そうですね……」

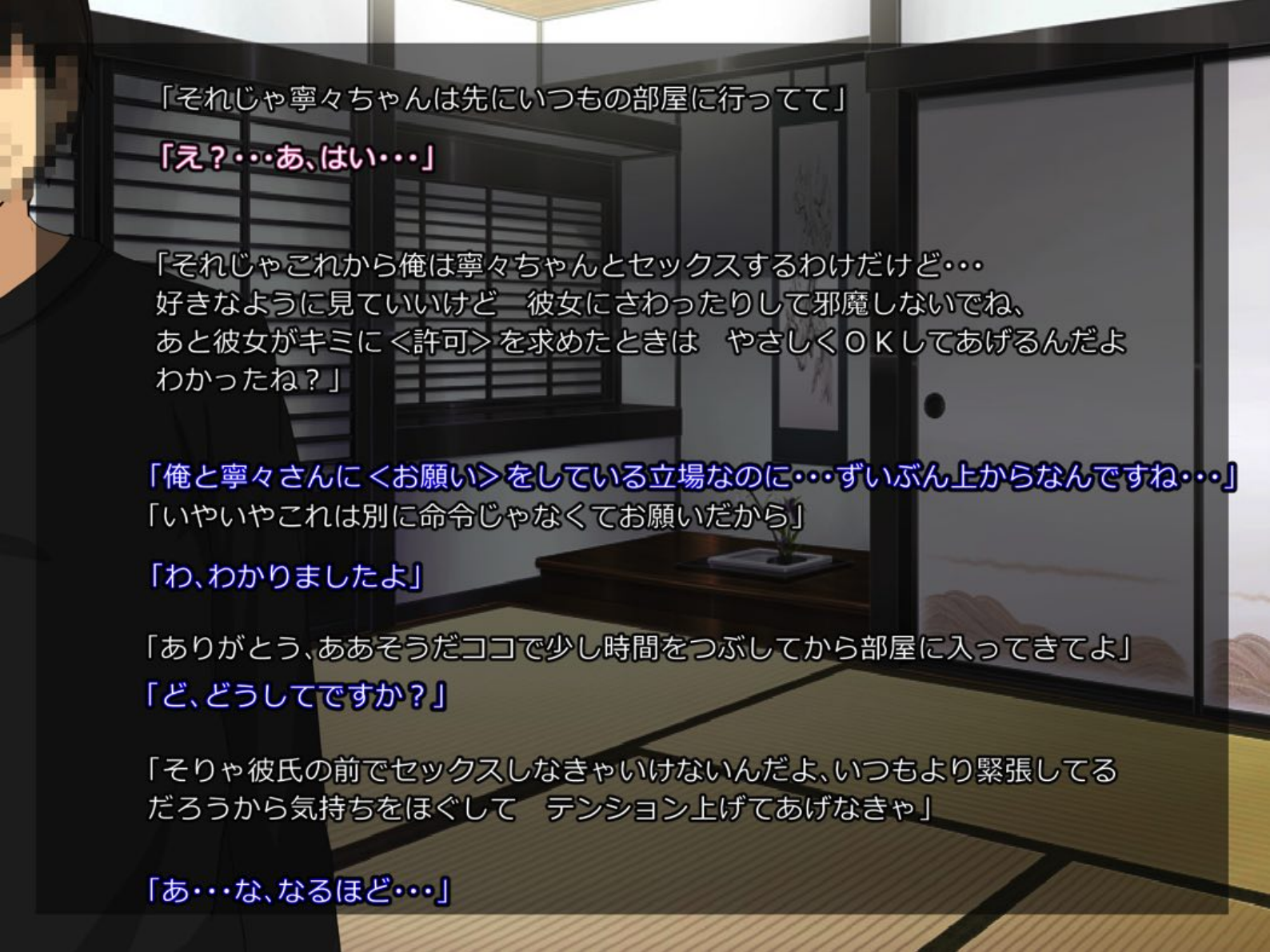
「ほら～、それに膣内射精のとき彼の許可をもらってから注入とか面白そうじゃん  
寧々ちゃんも彼の許可があったほうが気持ちよく俺の精液を受け止められるでしょ」

「ん～…まあ、そう…ですかね……」

「〇〇君にも都合があるから、毎回必ずそばで見てもらうっていうわけじゃなくてさ  
あとで写真や動画を見てもらって形でもいいじゃん。もう隠す必要ないんだから  
俺たちの愛し合ってる姿をちゃんと見てもらおうよ」

「べっ、別に愛し合ってるなんかないでしょ…お願いを聞いてあげてるだけです！…  
も、もうっ…彼の前で誤解を生む様な事言わないでください……」

「ああ、そうだったそうだった 俺からの一方的なもんだった、ごめんごめん」



「それじゃ寧々ちゃんは先にいつもの部屋に行ってて」

「え?…あ、はい…」

「それじゃこれから俺は寧々ちゃんとセックスするわけだけど…好きなように見ていいけど 彼女にさわったりして邪魔しないでね、あと彼女がキミに〈許可〉を求めたときは やさしくOKしてあげるんだよ わかったね?」

「俺と寧々さんに〈お願い〉をしている立場なのに…ずいぶん上からなんですね…」

「いやいやこれは別に命令じゃなくてお願いだから」

「わ、わかりましたよ」

「ありがとう、ああそうだココで少し時間をつぶしてから部屋に入ってきてよ」

「ど、どうしてですか?」

「そりゃ彼氏の前でセックスしなきゃいけないんだよ、いつもより緊張してるだろうから気持ちをほぐして テンション上げてあげなきゃ」

「あ…な、なるほど…」

言われた通り しばらくしてから そっと2人がいる部屋に入ると...



覚悟していたとはいえ その光景は〇〇にはあまりに衝撃だった  
寧々の裸を見たのも初めてだった 自分としたキスとは明らかに  
違う濃厚なキスをし 気持ちよさそうに吸いあう2人の様子に  
頭が熱くなり胸が苦しくなる



2人の唾液を混ぜ合わせる  
ように舌を絡ませる



そして再び唇を重ね合わせ  
〇〇にも聞こえるほどの音を出し  
唇を吸いあう



おっ  
おっ  
おっ



ん♡

寧々さんちも…そんな「気持ちよけな」な  
顔してちゅーちゅー吸らめおならすてくれよ  
「お願い」されてしかたなくやっつるぞっや  
ないのかよお…



くっそお…くっそお…くっそお…くっそお…くっそお…くっそお…くっそお…

おっ  
おっ  
おっ  
おっ  
おっ  
おっ



「ほらよく見て○○君、凄くない  
」レ。俺のおちん○ん、  
寧々ちゃんの喉の奥まで  
入ってるんだよ」

「……………」

「俺のおちん○んを  
飲み込んでる所、○○君に  
見られちゃってるよ〜  
寧々ちゃん」

「んっ…んっ…んっ…」

「ああ〜 きもちいい〜  
ふうっ〜 君にも体験させて  
あげたいけど…………  
そうしてあげられなくて  
「メンね」

なんでダメなんだよ…

「あとでもらおうとかが  
思ってもダメだよ〜  
寧々ちゃんは俺にだけ  
してくれるんだって」

「……………」



ゆっくり引き抜くと  
寧々の唾液でべとべとに  
なっている

くそっ…あんなモノ  
寧々さんの喉の奥まで  
突っ込みやがって…  
あんまり無理させるんじゃ  
ねーぞ、このクンが…



ん  
ておち…

ずんばー

「それじゃあ○○君お待ちかね、俺と寧々ちゃんの性器結合の時間です」  
「別に……待ち望んでませんよ……」

「え？…そうなの？あ、性器結合ってのが解りづらかったかな？  
俺のおちん○んを寧々ちゃんのオマ○にスッポリねじ込んで  
根元まで埋め込みます」

「それは解ってますよ……その上で待ち望んでないって言うてんです」

「あ……うすめ寧々ちゃん？」

「ん……ん……」

「うせんをらうって……うせんをらうって……  
これ……おっ……」

「……ん……ん……」

「んは……いらから早く入れて……って……って……ほしかったなあ……」

「んあっ……あっ♡」

「○○君、先っぽが入ってるの見えるかな？」

「み、見えていますよ……あ、あの……」「ドーム……」「ドームを  
つけないで大丈夫なんですか……」

「だって寧々ちゃんが生のおちん○んの方が好きだから  
しょうがないよ、ねえ寧々ちゃん？」

「……」

「ほら、寧々ちゃんどうしたの？ちゃんと彼氏に教えてあげなよ  
ちゃんと言えよ」のままでよ〜」

「な、生のおちん○んが好き……んっ……」

「……寧々ちゃん……」

「ふふふ というわけで 奥まで入れちゃうから しっかり見てね〜  
ほら寧々ちゃん、めっくり腰を下ろして……」



すばぶ…にゆる…と華々の…の…の…の…  
挿入される

「ん…あ…あ…」

「ああ〜きもちい〜…」と華々ちゃん  
ひとつになっただけで幸せ〜」

あんなにかいモノが…すんなり…華々さんのナカで…



「何回くらいつちやっして華々ちゃんにち○ほ入れたっけ？」

「え？…あ？…ん…え？…」

「ふふっ 覚えてないくらい たくさん入れちゃったってさ」

「………そんなしっわはわお華々ちゃんに聞かなくても  
SSPtJ4…」

××に跨った寧々が上下に揺れるたびに  
にちゃにちゃと水っぽい音が聞こえる

結合部分から

目の前で大好きな寧々が自分以外の男のち○ぽを  
挿入され気持ちよさそうに味わう姿を見させられている  
○君は 悔しさ、悲しさ・・・そして羨ましさでおかしく  
なりそうだった

ずるっつと膣から抜き出れた××のち○ぽ  
寧々の愛液でべっぴんなち○ぽ  
再び寧々の体内に埋め込まれてく



「寧々ちゃんが俺のち○ほで感じてる姿を  
○君が凝視してるよ」

「あ…は…は…は…は…は…は…は…」  
「俺のち○ほ、今どうなってる？彼の目を見て  
教えてあげなよ」

「えっちな姿を彼に見られて興奮しちゃってる…」  
「そっ…そっ…そっ…そっ…そっ…そっ…そっ…」  
「あ…は…は…は…は…は…は…は…」

「あ…は…は…は…は…は…は…は…」



「寧々ちゃんのマ○」はもう俺専用になっちゃったって教えてあげなよ」

「そ、そんな…専用になんて…なってるんです…」

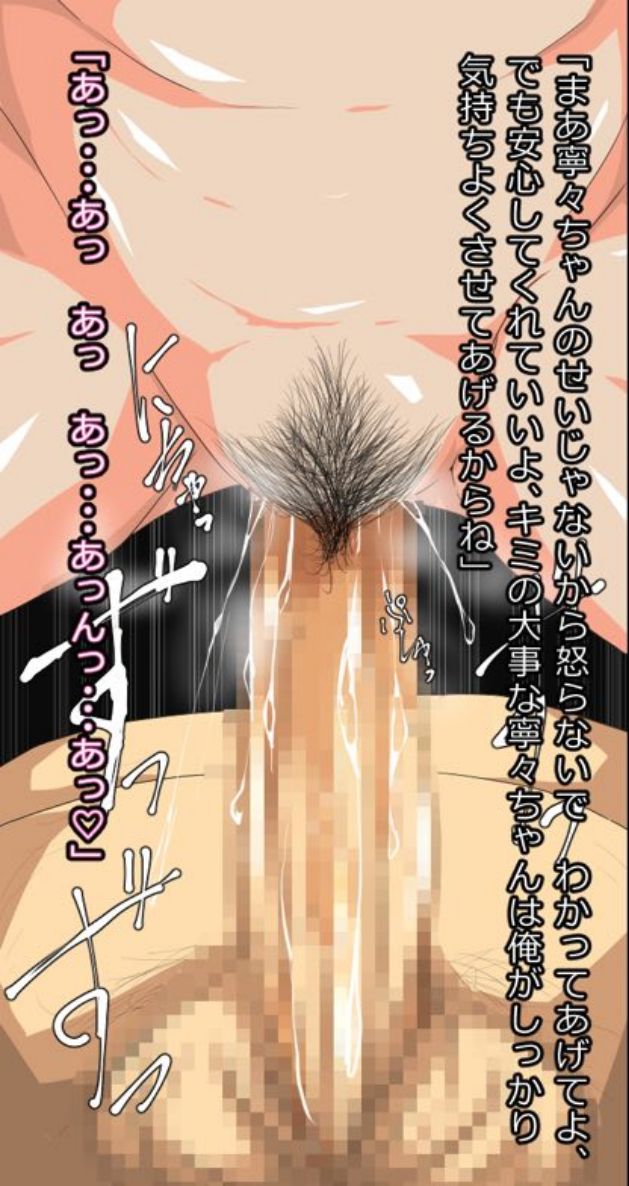
「あれ…でも俺のおちん○んしか寧々ちゃんのオマ○」には挿入させないって言ってたじゃん」

「そ、それは…あ…あ…」

「聞いた？○君？寧々ちゃんはキミの事は好きだけどおちん○んを入れていいのは俺だけだって」

「…そんな…な、なんで…」

「まあ寧々ちゃんのせいじゃないから怒らないでわかってあげてよ、でも安心してくれていいよ、キミの大事な寧々ちゃんは俺がしっかり気持ちよくさせてあげるからね」



「寧々ちゃんのエッチな姿を見て彼も興奮してるみたいだよ  
ほら おちん○んが大きくなってる」

「ねえ、寧々ちゃんに おちん○ん突っ込みたい？」

あ、は、は、あ、ん

あ、ん、ん、ん

「そ、そのやそうですよ…好きで好きで  
しょうがないんだから…」

「…「メンね…あう♡…私が…受け止めて  
あげなきゃ あう あう あう♡ いけないの…「メンね…」


「謝らないですよ…何か理由があるんでしょう…寧々さんが  
イヤじゃないなら…俺は…我慢できるし…」

「うおお、やさしい、感動しちゃうね、寧々ちゃん？」

「うん…ありがと…私も好きよ…○君」

「くるしくなったら自分でしていいよ、そこにティッシュがあるでしょ  
好きなだけ使っていいからね、かわりに俺は寧々ちゃんを好きなことだけ  
使わせてもらうから」





〇〇君にやさしい言葉をかけてもらった事で安心した率々の発言は  
いままで押さえつけていたものを吐き出すように  
少しづつ 大胆に 遠慮のないものになってくる  
「デート中に あっ♡ 急に××さんに  
呼び出されたこと…何度も…あったよね」  
「う、うん…」

「心配する事はない…とか言ってたでしょ…わたし」

「…うん」

「でも あの時もこうやって××さんとセックス…あっ♡  
してたの…ウソついてで…ゴメンね…」

「…い、いいよ…」

「電話してた時も…こうやって…おちん〇んを…入れながら  
話して…たんだよ…」

「〇〇君…わたしの…オマ〇コに…××さんの んっ…あっ…♡  
おちん〇んがっ あっ…お、奥まで…来てるのっ…」

「……うん……」

「す、すごく…キモチいいのっ…××さんの  
おちん〇んが…きもち…いいのっ…」

「ね、わたし…この人に…いっぱい調教されちゃったの  
…この人の精液の味も覚えちゃったし…オマ〇コの中にも何度も…何度も…あっ♡射精されちゃったの…」

「ね、寧々さん……」

「セックス…好きなの…××さんとのセックス…  
大好きに…させられ…ちゃったの」

「あっ…すごっ あっ♡ まっ…マ○コっ いくっ…  
マ○コっ いきそっ おっ…おっ…」

「ちゃんと彼に許可をもらわなくちゃ」

あゝ  
あゝ  
あゝ

あゝ  
あゝ  
あゝ  
あゝ

あゝ  
あゝ  
あゝ

あゝ

あゝ  
あゝ  
あゝ

あゝ  
あゝ  
あゝ

あゝ

あゝ

あゝ

「ん…はあっ…○…○君…いい?…  
××さんの…おちん○んで…イってもいい?」

「………ね、寧々さん……」

「あっ♡あっ あっ…イツチャウ…マ○コいくっ!  
お願い…マ○コっ…いかせてえっ…」

「い、いいよ…寧々さん…イっていい…よ…」



〇〇がそう言い終わると 寧々はビクビクと痙攣し  
xxにイカされた...

「ほら これが俺のおちん〇んで 寧々マ〇コが  
イっちゃった顔だよ...よく見てあげて」



「君の大事な寧々ちゃんは...んお...  
俺のち〇ぽでこんなにビクビク感じてくれて...  
ホントに可愛いよね」

「はあ…はあ～…うぶっ…イカされちゃった…」

「寧々ちゃん…彼氏が見てなのに潮吹きすぎ…」

「やだっ…なんか…はずかしい…」

「寧々ちゃん、俺もそろそろだから  
彼にお願いしてよ」

「あ…うん…」

ぽんぽん…  
ぽんぽん…  
ぽんぽん…

「あのね…xxさんが私の膣内に精子…出したがってる…  
オマ○コに中出し…させてあげて…いい？」

「に、妊娠しちゃうよ…寧々さんはいいの？」

「大丈夫だよお…そんなに心配しないで…  
中出しさせてあげて、お願い」

「わ、わかったよ…寧々さんが…くっ…いいなら…」

「やったあ～ 彼氏のご公認をいただいた…これはもう避妊の必要はないってことだっ！」

「よかったね ××さんっ あっ♡ あっ…ん♡」

「寧々ちゃんを俺の精子で孕ませていいなんて嬉しいな～」  
「ちよこまじは言っじよ…」

あーん

あーん  
あーん  
あーん

あーん  
あーん  
あーん

あーん  
あーん  
あーん

あーん  
あーん  
あーん

あーん  
あーん  
あーん

あーん  
あーん  
あーん

あーん  
あーん  
あーん

あーん  
あーん  
あーん

あーん  
あーん  
あーん

「んああっ 寧々ちゃんのマ○コ きもちい～…」

「うんっ…私もっ…あなたのおちん○ん…  
きもちいいっ…あっ♡」

「ああ、もう出そう…いい？ナカに出していい？」

「いいよっ…オマ○コにっ 精子…いっぱいだしてっ！」

「んおおおつ 出るっ…」


「あっ♡あっ あっ あっ♡出てるっ…危険日マ○コにっ…  
せーしいっ…きてるううう」

きっ、危険日!?

「…ふい～ 危険日マ○コに中出し…最高…」

「あっ…ああっ…あっ♡い、いっぱい…来てる…  
ほんとに…に…妊娠しちゃう…♡」

「うあ～まだ出る…ふふ いいんだよ寧々ちゃん  
彼氏公認の膣内射精なんだから、妊娠しちゃうよ」



「あっ…ん…〇〇君…わ、わたし…危険日のオマ〇コに中出しされちゃった…」

「妊娠しちゃうよ…寧々さん…」

「いまオマ〇コの中…xxさんの精液で…  
いっぱいになってる…あっ♡」

「xxさん…いつまで入れてるんですかっ  
早く抜いて…もういいでしょ！」

「ダメだよ～ このあと余韻を楽しむのが大事なんだから～  
しばらく寧々ちゃんにち〇ぽ入れたままイチャイチャしたいし…  
ああ、そうだ、俺と寧々ちゃん汗かいたからさ、なんか飲み物買ってきて」

「な、なんで そんなこと…」

「こんなに汗だくになった寧々ちゃんに水分補給させてあげないの？」

「わ、わかりましたよ…」

2人は膣内射精の余韻を味わうように 性器を結合させひとつになったまま唇をも重ね合わせ始めた  
〇〇がしばらく呆然と見つめていると

「んっはぁ…どうしたの？飲み物買ってくるまで寧々ちゃんにち〇ぽ入ったままだよ？」

「わ、わかってますよ…」

「まあ俺は寧々ちゃんとなら何時間でもこうしてられるけどね」

そう言うと再び寧々の唇に吸い付く

「くっ……」

〇〇は静かに後ずさりして退出し 飲み物を買いに出かけた…

買い物を済ませ急いで戻る〇〇、先ほど言ったとおり  
まだひとつに繋がったままイチャイチャしている寧々とxx

「ああ 早かったね・・・いったん休憩しよっか？  
あ、その前にもう一回チューして、チュー」

「うん」

「飲み物買って来たんだから・・・早く離れてくださいよっ！！」

「ふふっ わかったわかった  
彼がヤキモチやいちゃってるから  
離れよっか、寧々ちゃん？」



寧々はゆっくりと××から離れる  
する瞬間からポドポと精液があふれ出す

どどんだけ…俺の寧々さんの中に出してんだよ…





「あゝ……おちん○ん汚れちもっしつななな……  
まっしてなゝ キーッすすなななな……」

寧々は自分の愛液と××の精液でベトベトになった  
ち○ぽを丁寧に舐める

「んあ……ね、寧々ちゃん……そんな下  
丹念にお掃除フェラしなくていいよ……」

「そ、そうだよ 寧々さん……ほり  
喉渴いたでしよっ」

「そうそうせっかく○○君が飲み物買ってきて  
くれたんだから、それにまたすぐに寧々ちゃんの  
オマ○に突っ込んで汚れるんだから」

「……」



尿道のなかの精液も  
吸い取る寧々

ゴッゴッ  
おオオオ

ゴッゴッ

ゴッゴッ

「ありがとね、わざわざ買ってきてくれたし...」  
「メ、メ、急におつかい頼んでじゃうまいな事して」

「え...ごやあ... ごよごよ...」

それより...びったり  
くっついてマ○」を  
当たり前のように  
弄くらせることの方が...  
気になるなあ...



「寧々ちゃん」

「ん？」

「俺にも飲ませて〜」

あ、口移しでね

「しょうがないなあ〜」

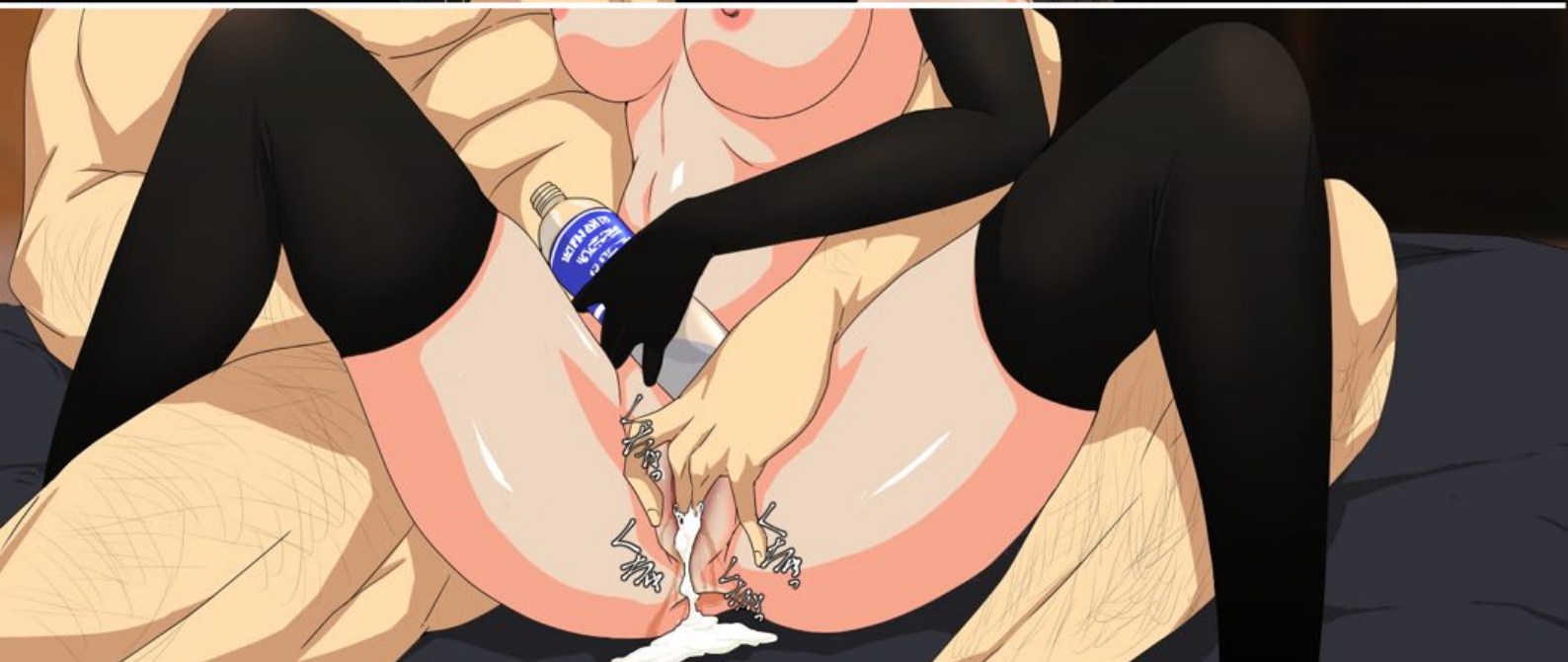
「はい あ〜んこっ」

寧々はそう言うと飲料を  
口に含み ××に口移しで  
飲ませる

「んっ…んっ…ああ〜  
寧々ちゃん味がする」

「もうひとくち頂戴」

「んんっ…んんっ」



「寧々ちゃん 寧々ちゃん」

「なあに？もっと飲みたいの？」

「ちがうちがう、寧々ちゃんが妊娠しちゃったらどうするのかと思って？」

「あなたはどうしてほじくの？」

「産んでほしいなあ〜…」

お腹の大きくなつた寧々ちゃんとおセックスもしたいし」

「うん…前向きに検討します♡」

「ちよちよっど…それはダメだよ」

「あらう…彼様がダメだつて言ってるよ」

「じゃあ…ダメ」

「でも 妊娠したら産んだほうが絶対いいと思うよ  
随胎は寧々ちゃんの体にも心にもよくないよっ」

「そ、それは…(ん？えっ、妊娠する前提なの？)」



「あー俺に寧々ちゃんを取られちゃうと心配してるんでしょ…  
安心してよ、寧々ちゃんはずっとキミのモノだって約束してるでしょ」

「じゃあこうすればいいじゃん、キミと寧々ちゃんは結婚して  
2人で仲良く産まれた子を育てる、どう？」

「け、結婚…俺と…寧々さんが…」

「赤ちゃんできちゃったら…私の…もっ…」

「そ、それはもちろん」

「よかったね、寧々ちゃん、もっ…」

「ん…」

「これで安心して俺の精子で妊娠・出産できるね」

「ん♡」

「あれ？なんかおかしいけど…でも寧々さんは俺のモノ…  
いや…良いんだよな」

「圧倒的におかしな状況に 催眠状態の〇〇君でも混乱してしまう」



「じゃ、じゃあもう帰るよ 寧々ちゃん」

「何言ってるの○○君、まだまだまだ寧々ちゃんは返せないよ、まだまだ俺と寧々ちゃんはセックスするのは、だよね寧々ちゃん」

「え…えっと…うん…  
もう少しだけ…我慢して  
あけて」

「…わ、わかったよ…」

「…メンね 長い時間 つまねおせちやっつて」

「次はパイヌリフレラして…お口で  
精液飲んでもらいたい」

「え…うん ふっ…  
しょうがないなあ…じゃあ  
横になって」



「寧々ちゃん、〇〇君がうらやましそうに見てるよ」  
「んっ♡んっ…ふっ…んっ…んっ…」

「寧々さん…お、俺にも…それ…してほしいんだけど…」

「んっ…寧々ちゃんを困らせちゃダメだよ、寧々ちゃんが  
くわえていいのは俺のおち〇ちんだけなんだから」

「んっ…んっ(いめんね)」





おっぱい

おっぱい  
おっぱい

「もうちよっと強く吸って…寧々ちゃん…」

「2」

「あめ…そうそう…きちきち…もうすへへNNNNNN…  
俺の精液全部飲んでくれるっ」

「2♡」

「うんうん…うんうん…うんうん…うんうん…」

「あ〜ちよ〜ちよ〜…それちよ〜ほ〜NNNN」







んあ♡

「ほら○○君 俺のザーメンが寧々ちゃんの口の中にとっぷり  
出てるのが見えるっ」

「み、見えていますよ…」

「じゃあ 寧々ちゃん 全部「ツクン」していらよっ」



んあゝあゝ

「おいしかった？俺の精液？」

「えっ……えっ……っ……」

「あれ？いつもは おいしーって言ってくれるのに……ほんとに  
飲みたくなかったのかな？それならこれからはもうゴックンなしに  
しよっか？寧々ちゃんの嫌がることはしたくないし」

「……あゝあゝ……っ……っ……」



寧々は再び××のち○ほに吸うぞ

「寧々ちゃん…お掃除はそのへんにして…マ○」…  
またマ○に入りたい」

【20】

「じゃあまた寧々ちゃんのおマ〇〇におち〇ちん入れさせて  
もらうねく…いいかなあ 寧々ちゃん？」



「はあ…はあ… 〇〇君…わたし…また  
おち〇ちん…挿入されちゃうね…」

〇〇君がいる方向



「うあつ…やつぱ寧々ママ〇」は…気持ちいいよなあ〜〇〇君」

「俺は…寧々さんのマ〇」の感触…知りませんよ…」

「あ、そうだった ごめんごめん、そっぴや寧々ちゃんは俺としかセックスしたことないんだっただな」



「〇〇君にも味あわせてあげたいんだけど…  
ダメなんだよね〜 寧々ちゃん？」

「あ…ん…ん…ん…」

「ははっ ダメだって 愛してる俺のおち〇ちんしか  
オマ〇」させてあげないってさ〜」

「ん…寧々さんは言っていないでしようが…」

「ほら寧々ちゃん 彼に いまどんな感じなのか教えてあげなよ」



「あっ……あっ……おっ 奥まで……いじり……あっ♡  
「♡……おっ……おっ……おっ……私の中に……♡あっ♡」

「……あっ……あっ……♡」

「気持ちいい〜」

「はあ はあ……はあ……はあ……おつかい……SSS……アハ……はあ はあ」



「俺のおち○ちゃん好き？」

「すっ 好き♡ あなたのおち○ちゃん……好きっ♡」





「ああ、ほら〇〇君 寧々ちゃんが俺のおち〇ちんでビクビク  
感じてイってるよ…」

「自分のち〇ほで好きな女をこんな風に  
ビクビクさせてるって思うと 最高の気分だよね」

「あ……………あ……………う……………あ……………」

↓ムッ  
↓クッ  
↓クッ  
↓クッ



「ね、寧々さん…まだするの?…もう帰ろうよ」

「え?う、うん…あっ…も、もう少し…だから」



寧々さんの耳元で何囁いてるんだ？



「んっ…んっ…あっ♡…うん…うん…  
わたしも…あっ♡ふふっ…もうっ…あっ♡」

「お…あ…いぐう…ま、また…いぐっ…」



「あ♡…ああ♡…いぐっ♡」





「はあ…はあ…こ、これじゃ…ほんとに  
妊娠しちゃうかも…ふふっ♡」



「はあ…はあ…この人も満足してくれたみたい…  
シャワー浴びてくるから待ってて、そしたら一緒に帰ろっ ○○君」

「う、うん」



普段のテンションに戻ると なんとなく二人の間に微妙な空気が流れる

「い、いやあ～ な、なんか…えっと……」

「えっ！えっと…なんか私…すごい事言ってた気がするけど…  
変に舞い上がってたって言うか…  
その…勢いで言っちゃっでるというか…  
本心じゃないというか…その～…」

「そ、そりゃあ 人に見せながらすることじゃないから…  
変な感じになっちゃうのはしょうがないよ…」

「う…うん…ね、ねえ…ほんとに幻滅した？」

「するわけないよ…誰にも渡したくないって思った」

「ほんとに？」

「ほんとだよ」

「ほんとにほんと？」

「ほんとにほんとだって」

二人とおじさんの異常な関係は続いていく

寧々たちと同じように凛子と愛花も異常な日々を送っていた…





「わっ…最悪っ…最悪っ…あ」

「残念だけど凜子は俺の精子で孕まされたちゃんのです」

「あ、あたりまえっ…ドクもっ」

「なんだよー まだ妊娠するの嫌がつてるのぉ？」

「んあっ…ま、またナマで…挿れてるっ」

ぞろぞろぞろぞろぞろぞろぞろ

「どりあえぞ二発 凜子のオマの」に出しちゃうね

「そっ そんなっ・・・気軽じゃ・・・どっから事じゃ・・・あっ・・・ない・・・」

「あぁ～ やべ・・・おっ！く気持ちよふん・・・おあ  
なっできちゃったよ～」

びんびん

びんびん

びんびん  
びんびん  
びんびん  
びんびん  
びんびん  
びんびん  
びんびん  
びんびん  
びんびん  
びんびん

「おっ・・・おっ・・・おっ・・・」

「あっ・・・あっ・・・か・・・顔に・・・  
かけて・・・いらからうっ・・・なる  
中は・・・」



「……んんん……ちやうた……」

「……んんん……♡……」

びん  
びん

びん  
びん

びん  
びん  
びん  
びん



「抱っこしてズブズブするから俺に抱きついて〜」

「んっ あっ…んっ んっ…んっ…」

「あ、そうそう ネ「リン」の尻尾…ケツの穴にぶっさすタイプもあるからなあ〜」

「そっ それ オカシイ…でしょ…」

「なんで?」

「だ、だって…猫の尻尾はそんなところからはえてない…じゃん…」

「ま…そうだけど…とにかく凜子のケツ穴弄くりたいから…覚悟しといてって事だよ」

「…やだ…」

「ダメだよ、凜子は俺の精子で妊娠するしケツの穴もズボズボされちゃうの!」





「やだあ…やだやだあ…」

「そんなにヤダヤダ言わないのっ…」

「だって…あっ♡…」

「ふふっ…またオマ○に精子  
だすよ…」

「もう…やだあ…」

んん

ええ

「じゃあ次に俺が射精したら  
オシッコしてよ…そしたら今日は  
終わりにしてあげる」

「あっ…あっ あっ…やだあ…あっ♡」



「んあぁっ…ほ、ほり瀧子っ…ム〇ッ  
精子でてるわっ…オジシ「はっ」

「あっ…んはっ…そ、そんな…らタイミングで…  
でないようっ…」

「はやくしないと またマ〇に精子だぞお」

「…っ…っ…っ…っ…っ…っ…」



「んっ……んぶっ……ん……ん……」

「はははっ なんだよ凜子お  
んになっっいはい出るじゃんオシッ」

んっ  
んぶっ

んっ  
んぶっ

「ヨシヨシ、いい子だな凜子は……  
産まれてくる子もいい子だといいなあ」

「はあ……はあ……」

んっ  
んぶっ

もっ

もっ





「あ〜ん」  
「美味〜んあな〜ん」

「凜子のオシッコで汚れちゃったから  
ちゃんとなめてね」  
「んもあ〜ん…自分がオシッコ  
しろって言ったんじゃない」

「なつ 悪らね〜凜子はあか〇かこ  
舐めるの嫌いなのに」 お掃除させちゃって  
「2♡♡…2♡♡…ほんっだよ…」

「中出しされたまぐっで…オシッコ  
させられて…お掃除ンヘア…  
ホントに最悪だよ」

「俺の精子で妊娠が抜けてる」

「最悪」



「ぶぶん どうだ？」

「すごく似合ってますよ〜 素晴らしいです愛花様」

「当たり前でしょう」

「髪型も素敵です〜」

「そう…衣装も髪型も気に入ったのね…」

「はー」

「じゃあ かのこの髪型と格好は  
一度とっちならぬ」

「Love you love youが〜」

「別にあなたに気に入って欲しいわけじゃないし  
それになんともくインジワルしたくなかったから〜」

「んんんなあ〜」



「ぶぶっ っら顔するじゃない…なんとも言ってるけど  
私のいと好きになっても無駄よ 私は彼の所有物なんだから」

「わ、わかっていますよお…」

「その彼氏様がまだ妊娠してないのかって  
じゃ腹なのよ…」

「はあ…」

「今日は絶対妊娠するわよう  
危険日だし、あなたの汚い精液  
十回くらいオマ〇にだせば  
孕むでしょ」

「十発ですか…」

「精液でオマ〇に満タンにしたらなまや  
もっとうすまで許さなから ぶぶっ」



「そなたじゃわいわいサマシクしまじよ…私の足の匂い嗅げばずいとおちのちん勃起するぞじや」

「あ、愛花様のパニー姿ですぞカチ「チです」

「あり…そなたじゃ嗅がなへんぞぞぞぞぞぞ朝から穿んと蒸らしておられたのじよ…」

「あっ！一応嗅ぎます嗅ぎますっ」

「さ・あ・あ・ん」

「いえ、ぜひ嗅がせてください  
愛花様のくっくっせいら足裏の匂い」

「へ・わ・ん・ん耳が悪くなったのかしらん」

「あ、甘く馨しいら愛花様の足」

「ぞろぞろねえくサイわけならものね…じやあ好きにだけ嗅ぎなれんぞ」





「ええん ああ〜さあさあさあさあ」

「ほろ…ほろ…ほろ…わいゝ興奮さああ」

「ぶぶっ 鼻をっんっんっんちやあ〜」

「んあ…なんか…湿ってます…」

「満足したら言いなから せいこヤックスよ」

「あ、あ」



「うはあ……愛花様あ……もうグチヨグチヨじゃないですかあ」

「んっ……あ♡……い、挿れやすへっ……SSPJJや……」

「そりゃあもう いいです……非常にいいです……ああ……  
あったかい……」



「あふ…あふ…あふ…あふ…♡」

「あふ…あふ…あふ…あふ…」

「な、なにしてるの…挿れただけで満足してないで…も、ももっとスラブスラブして…うっばら…出しな…あふ」

「大丈夫ですよ…さっそく一発目が…出てるんですよ…」

「も、も…挿き回してからあ…お、奥をグリグリしてからだしな…あふ」

「…お解りです…」

「♡あふ…あふ…あふ…あふ…♡」

あふ…あふ…

「おっ おっ…おっ おっおっおっ」

すく感じてくれるのは嬉しいが…自白わいなあ〜 ふふっ

じゅんじゅん じゅんじゅん

んんんんん  
んんんんん  
んんんんん



「愛花様…・・・目が怖すぎますよ…」  
「ん…ん…ん…」

「せうかくの綺麗な顔が台無しですよ…・・・スマイル固定でお願いします  
あ、脇もよく見えるよん」

「ん…ん…ん…ん…ん…」

「ん…ん…ん…ん…ん…」

「ん…ん…ん…ん…ん…」

「ん…ん…ん…ん…ん…」









「目をむかなくてまの」 イケてるぞおね

「はははは ねえねえ」

「でせ、目をむいた愛花様も  
好きですよ、飾らなく」

「なげんぞ…」

「少し休憩いいですか？」

「少しだけよ」



「んっ…妊娠してる…私のM.O.T!」

「いいいや 拡げてみてもわかりませんよ…  
でも危険目にコレだけ中に出せばきつと妊娠してますよ」

「あぁあ…あなたの臭くて汚い精液で孕まされちゃった  
のがあぁ…ふふっ」

んあ〜♡

んっ…

んっ…

「しこたまぶち込んだんでどんどんあふれてきちやいますね〜  
ほら愛花さま口あけて〜」

「んあ〜♡」



「AVですか？お尻っ尻っですか？俺のザーメン」

「んっ…んっ…おむっ 臭くておいしくない」

「愛花様のマン汁が混ざってるから臭いんじゃない？」

「何ですかっ…っもっ」一度っしてみっ…」

「さっ…なんでもならっです…っ…」

「んっ…」

「んっ…」

「もし妊娠してなくても また精子

っっっでもっしますから」

「あたりまえでしょ 逃げられないわよっ」

「あららら……この体勢は精液飲みづらいですか？」

「んほっ……んほっ……おっ……おっ……」

「んぶぶ どんどん飲まないと溢れちゃいますよ〜」



あれ以来 寧々と××の交尾を見せ付けられることはなかったが  
変わりに動画を見ることになった〇〇君

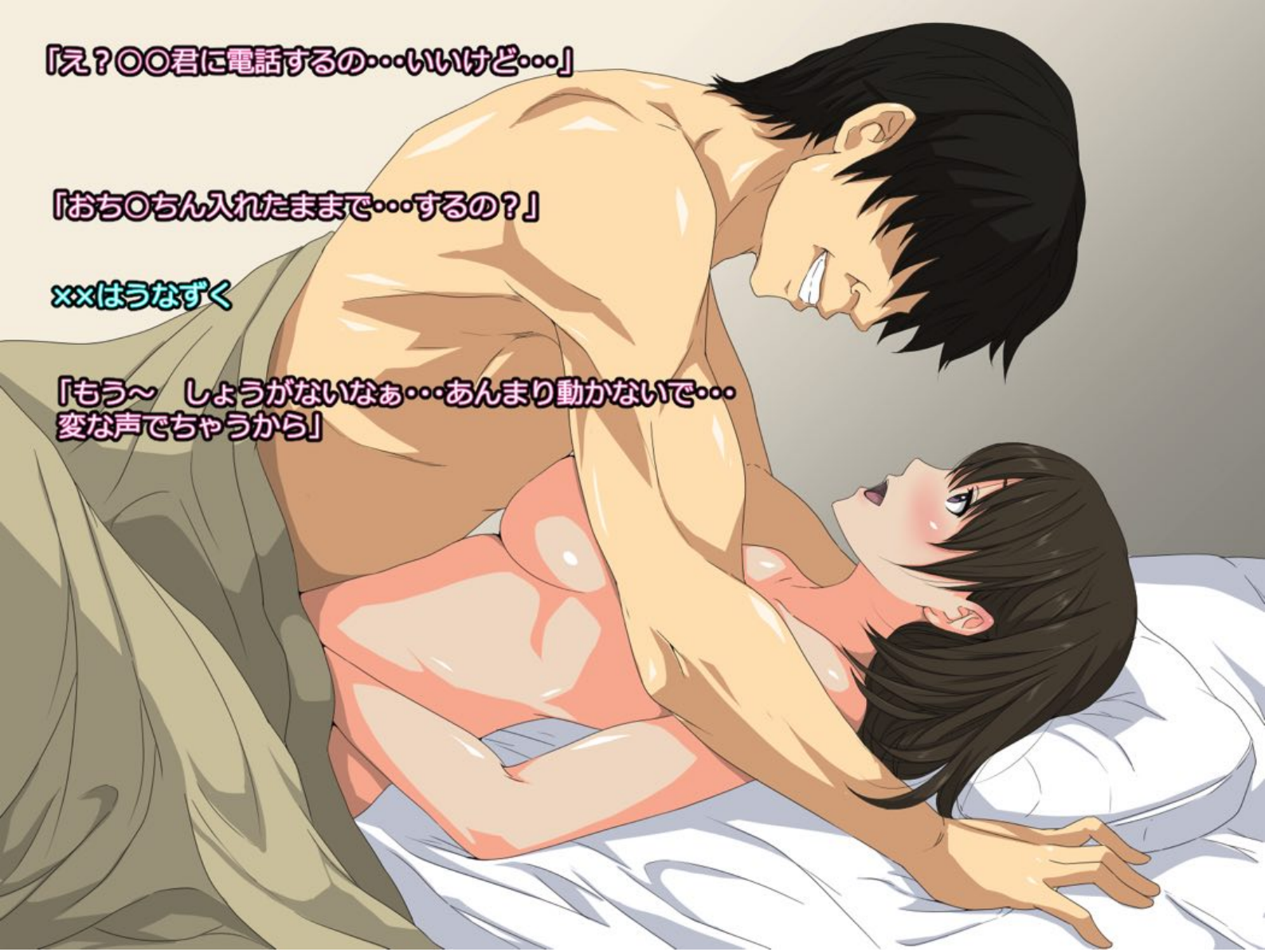
前半は 告白前  
後半は 告白後で最近のモノだそうだ

「え?OO君に電話するの...いいけど...」

「おち○ちん入れたままで...するの?」

xxはうなづく

「もう~ しょうがないなあ...あんまり動かないで...  
変な声でちゃうから」



「え？う、うん…大丈夫…うん」

「ふふっ…わたしも…うん…そうだよ…あっ♡」

「もうっ…急に動かないでっ」

「ん〜ん、なんでもない…  
うん…うん…心配しないで…じゃあ またね…」



「んふふっ 緊張した？」

「し…した…」

「OO君、なんか心配してた？」

「また…あなたと会ってるのか って」

「あ～ かわいそうに…ちゃんと言ってあげれば  
よかったのに…」

「な、なんて言うの？」

「今xxさんの生おち○ちんがずっぽり  
入ってますって…  
そんで膣内射精してもらいますって」

「だ…だめよ…そんなの…あっ♡」





「彼氏が心配してるのに、他の男と生セックスなんて…悪い子だなあ 寧々ちゃんは」

「おっ♡…だだっで…あなたが…してらっで…らっからあっ」

「そんな悪い子のオマ○○は 膣内射精の刑に処してあげる」

「Love…♡Love」





「んあ〜…ぶっ…また陣々ちゃんのオマ〇に挿っちゃった」  
「はあっ…はあっ…あ…」

「あ♡…まだ…抜かなさるっ…」

「はあっ…はあっ…はあっ…はあっ…」

「うん…ん…ん…ん…」



「あれから〇〇君はどう？なんか変わった？」

「うん 電話の回数が増えたかなあ あと  
すごく優しくなった気がする…もともと優しくかったけど」

「へへ よかったね、怒ったり冷たい感じにならなくて」

「うん」

「あ、寧々ちゃん 今日ほごごじゃなくて  
校内でオシッコするよ」

「え？大丈夫なの…勝手に入って…」

「大丈夫だよ 心配しないで」



「よし 寧々ちゃん専用トイレ設置完了！」

「コレなら廊下を汚さなくていいねっ」

「持ち歩くの大変だけどね」

「人前でオシッコするのって…何度やっても  
恥ずかしい…」

「そりゃそうだよ 今寧々ちゃんはすごく恥ずかしい  
事してるんだよお、すっぽんぽんで学校の廊下で  
オシッコするなんて 変態だよ ど変態」

「やだ…あ…もっ…そんな風にいわないで…」



「それじゃあ 放尿開始！」

「えーあ、はっ はっ」

「ははっ、ちゃんと寧々便器に入れないとダメだよー ずいぶんはみ出てるよ」

「うーいぬとなわら…」

ちんちん。

「しかし…寧々ちゃん 出しすぎ…」

「あ…我慢してたから…」

「え？言ってくれればもっと急いだのに…我慢はよくないよ」

「しん♡ありがとう ××わん」

びゅわー  
びゅわー









「あ、そりゃだ…わたし  
……………  
「妊娠しました…  
……………  
「うん、うん」

「誰の精子で孕んだのかも  
言わなきゃ」

「あ、そだ…××さんです  
××さんの精子で妊娠  
しました…スズキ」

「私が自分の精子で  
孕んだんで××さんは…あっ♡  
すっ…すっ…上機嫌です…♡」



「わっ…私は…あつ…  
も、もう妊娠してるの！…  
相変わらず…膈内に…  
射精…したがります…」

「××さんは…♪♪」がく  
私の体内に…排泄するのが  
好きみたい…です…あつ♡」

「んああ…きよ、今回も…  
妊娠マ○TJ…♡♡♡♡♡  
精液…注がれる♡…思♡♡♡」

お！♡

ん♡♡♡





「元氣な赤ちゃん産むから  
さっさと産んでほしいわ」

「はあ…はあ…  
お、お知らせは  
これだけです…」

そして妊娠した彼女たちのおなかは…



取り返しがつかないくらい大きくなった…

なんだかんだあって○○と寧々は  
××が用意した家に二人で暮らすことになった

家賃や光熱費などすべて××が負担してくれている  
しかも○○君の口座に毎月すごい額の生活費が  
入金されている

どうしてこんなことしてくれるんですかと聞くと  
「○○君にはいろいろ無理を聞いてもらってるし  
寧々ちゃんに金銭的な不自由をさせたくないから」  
だそうだ

しかし ○○君はいまだに寧々に性的な事を  
させてもらえない…それどころかキスさえもさせて  
もらえなくなった

好きな人がいつもそばにいる お金にはとりあえず  
苦労しない…でも 寧々とやりたい事はできない…  
嬉しいけど苦しいというわけわからん状況になっている

今日も××が二人が暮らすこの家に来てきた



××と寧々の二人きりで部屋の中で何か話している…○○は気がなつて部屋の外でフンフンフンと泣いてる寧々が部屋から出てくる

「あの人今日は泊まっていくつもりみたい」

「ぞ、ぞう…」

「たぶん 朝までセックスするから気にせず先に寝ちゃって」

「あ、ああ わ、わかったよ…でもあんまり無理しちゃダメだよ…」

「うん 大丈夫 心配しないで でもこんなお腹になってるの私のごとこんな頻りに抱きにくるなんて…よっぽど私のこと好きなのね ふふっ しょうがない人だよね  
一応わたし人妻なのに」

「…ほんとにしょうがない人だよ…」



「ふふっ ヤキモチやかないやかない  
あと今日は部屋に入ってこないようにって言った」

「ああ、わかった(元々あの部屋は××さんの許可がなきゃ入っちゃダメって約束だから わざわざ言わなくても…)(」

「じゃあ おやすみなねら」

「お、おやすみ…」

「なんか機嫌がいらいら〜」

「ん？別にそんなことはないけど…」

「そ、そう…ホントに無理しちゃダメだよ…」

「なあ〜に、どうしたの？私とあの人がセックスするのが気になって眠れない？…：…：しょうがないなあ〜」

寧々はストッキングとパンツを脱いで〇〇に渡す

「それをクンクンしながらシ「シ」してスキリすれば眠れる？」

「うん」

「うん」

そして寧々は××が待つ部屋に入っていった  
入室するときの横顔が ものすごく嬉しそうだったのが  
〇〇君は気になった









「あっ♡あっ♡♡…ま、マ○にきそ…おっ…」

「俺がマ○に出したらイクんだよ、いいね…  
それまではイっちゃだめ…んおっ…」

「おっ、おっ、おっ…」

「は、は、は…ら…ら…ら…マ○に精子きたらあ…ごきげん…  
ん…ん…ん…おっ…おっ…おっ…ら…ら…ら…ん…ん…ん…」

その時××の精液が寧々の中に注入される

「Svnn…Svnn Svnn Svnn」

「ふう…寧々ちゃんの妊娠マ○…吸い付く…  
そんな俺の精液をマ○で飲むの嬉し〜」

「はあ…あっ♡…嬉し…あなたの精液…おっ…  
私の妊娠マ○に…ら…ら…ら…ああ…♡」



「もう一発欲しいっ」

「うんっ 欲しいっ…もうぐんぐんっ」

「いいよ、欲しいだけあげるよ」

「うれしっ」



入室の許可はもらっていないが ドアのそばで中の様子を伺っていた○○君

寧々の嬌声を聞き もう毎度の事とはいえ嫉妬と悲しさを感じる

彼女は俺の嫁さん なんだよな…なのに

××さんは朝までセックス 俺は匂いつきストッキング…

まあストッキングは嬉しいけども、やっぱりおかしくないか「レ…

ど、思ったところでもうするんともできないけどな…

ふう…ストッキングの匂いでオナニーして寝るか…

「そーいちゃ〇〇君はどうしてるかな？ドアの外で様子を伺ってるかもね」

「…私のパンシンの匂いを嗅ぐパンパンパンパンパン…」

「あははっ かわいいわね」



「最近、私のおっぱいを吸わせて…」

「そりゃ好きな女のおっぱいを吸いたいののは当然だよ」

「そのたびにちゃんわり断るの、ちょっとカワインウになっちゃって…」

「寧々ちゃんはやっぱ優しいなあ、でも大丈夫、今日みたいにパンツの匂いを嗅がせてあげれば落ち着くよ」

「よしなら…ごんだけっ…」

「俺の寧々ママ〇」に…また入れちゃおう」

「あっ♡ママ〇」だけじゃないよ…わたし…は…全部…  
あなたのモノだから…」

「ふふっ だからそんな事言っちゃダメでしょ〇〇君が  
もし聞いてたらどうするの？」

「うん ぐんぐんわさる…」



「まあ 確かに寧々ちゃんは俺のモノだけど

〇〇君のことを一番大事に思っていてほしいんだよね」

「うん…わかってる…」







「そんなに俺のこと好き？」

「あっ♡好きっ…♡××さん…♡愛してるっ…♡愛してるのおっ♡」



「ふふっ でも〇〇君の前ではそんなこと  
言っちゃダメだぞ、彼が寧々ちゃんと一緒にその腹の  
子供育ててくれるんだから〜」

「うん♡わかってる…♡」

「妊娠マ○コにザーメン欲しい？」

「おっ…あつ♡…ほ…ほしっ…ほしい…せ～し…マ○コに…ちょうだい…♡」



「あ…ああ♡…おあつ…♡…」



「寧々ちゃん」

「ん?なあに?」

「マ○コ気持ちよかった?」

「ふふ♡…うん♡」

「寧々ちゃん」

「ふふ、なあに…ちゃんと聞いているよ」

「俺も愛してるからね」

「え!…もうっ…ふふっ♡」

F I N

**\*\*ここからは寧々と××が自分たちのハメ撮り動画を見ながら  
トークしているという状況です**

**「ねえねえ…コレもう彼に見てもらったの？」**

**「いや、まだ…また俺が寧々ちゃんを弄繰り回してるのが気に入らなくて  
ご機嫌を損ねちゃったときに渡そうかな~と思ってる」**

**「そうね…彼は私が××さんと仲良くしてるとヤキモチやいちゃうから  
…そこが可愛いんだけど ふふっ」**

「この制服ブレイのときってもう寧々ちゃん妊娠してたっけ？」

「ん…どうだったかなあゝ まだだったと思うけど」

あけっ

んん

ウエイトレスさあゝん

「もう…私のお尻は呼び出しボタンじゃならぬ…」

「は、は…注文ですか」

「じめじめめん 寧々ちゃんのお尻のむっちりデカ尻見ると  
っ…ピシヤピシヤ叩きたくなっちゃって…」

注：この黒い枠内のセリフは動画内のセリフです

「もうおち○ちんイっちゃいそうなんだけど……  
このままいいですかね？」

お、お客さま……膣内射精は……  
オーダーされていませんが……

んっ♡ あんっ♡

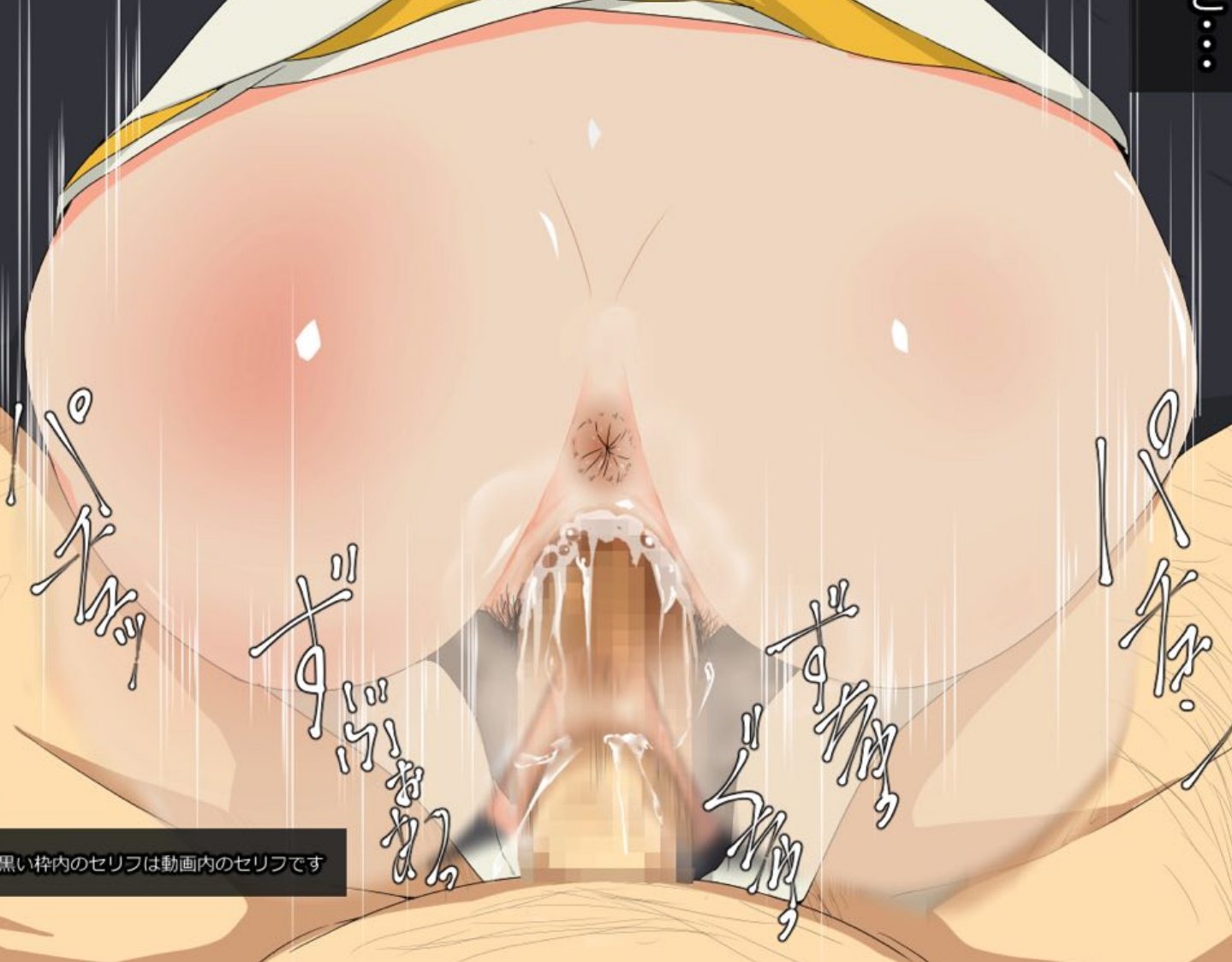
んほ♡♡♡

「それじゃ追加で」

「か、かしくまりました……♡」

「寧々ちゃんのケツの動き……すごいね」

「気持ちよくしてあげようと一生懸命なのっ」



注：この黒い枠内のセリフは動画内のセリフです

「んあゝゝ出た出たあゝゝあれ  
オマ○コ絶頂はオーダーしてないけど…」

「ち…サービスです…」

あゝあゝあゝ♡

あ♡

あゝゝゝ♡

あ♡♡♡

「ゲツ穴ヒクつきもですか？」

「そゝそちらもサービスと…なっております」

♡

♡

♡

びん

びん

注：この黒い枠内のセリフは動画内のセリフです



「ずいぶんとサービスがいいので  
また利用したいと思います」

「あ、ありがとうございます…  
ま、またの…ご来店…お待ちしています」

「それじゃお会計のほうおねがいします」

「は、はい…お掃除フェラ5分になります…」



注：この黒い枠内のセリフは動画内のセリフです

「でもこうやって動画で見ると お掃除フェラでお会計って…ほんとにバカっぽいね」  
「でも寧々ちゃんの好きなことやらせてあげてるわけだから、お金と似たような価値があると思うんだけど」

「ぐっぐっ好きごじゃなごっ…」



「えっっっ……でもこんとき長くなかった？お掃除どころかもう一回射精するまで食いついてたよ？」  
「んっんんんん……」

「実際、ほら もう一回寧々ちゃんに吸い取られてる」

「あいつは5分ほどかすいぶん長いし  
しゃぶられてた気がする……」



「あ…」「全裸より恥ずかしいのよね…」

「蒸れ蒸れで汗くっさくさく最高だよね」

「まあ、くわらうが言いつと」

「もう一度と着てあげないっ」

あ、♡

あ、♡

あ、♡

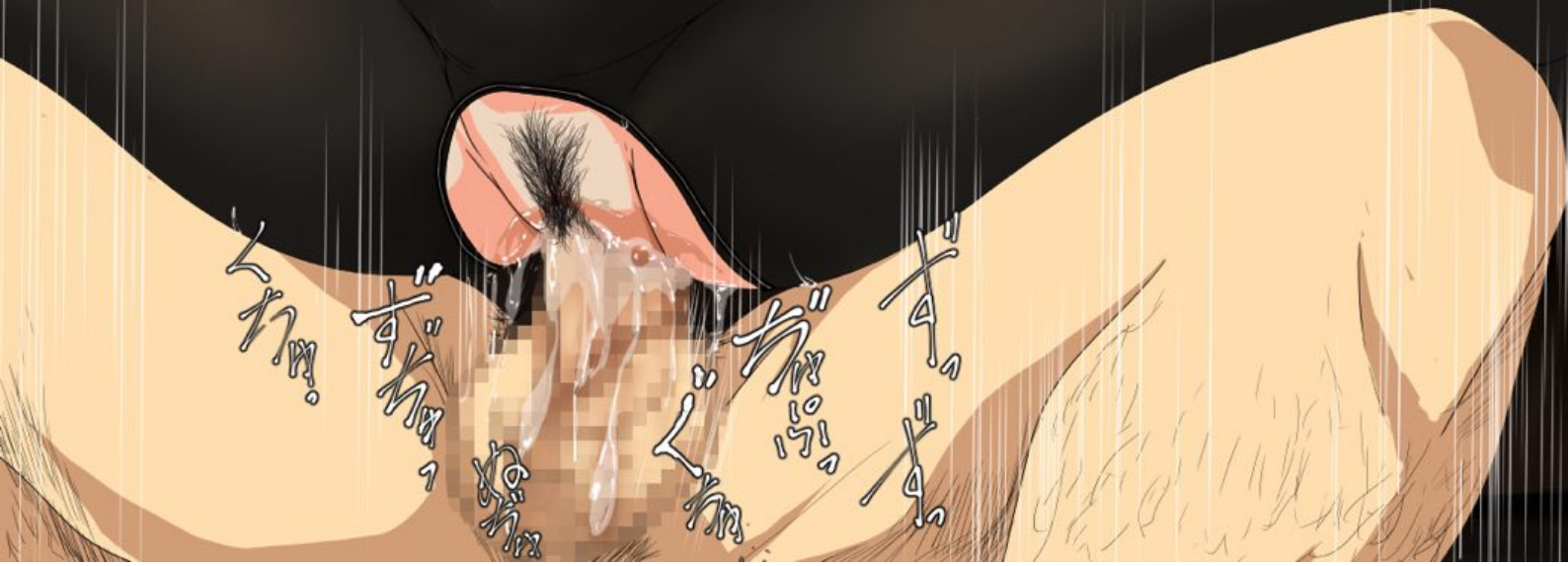
あ、♡

あ、♡

らぶん

「あ、ゴメンゴメン…  
あ…くっさくさくくっさくなくて…  
えっと 寧々ちゃんの汗臭いニオイは  
ち○ぽギンギンになるといっつか…とにかく  
くっさく最高って事」

「ぶっ すごいわ…好きならまた着てあげる」



「この表情はいつてるよな?」

「うん…」

「何がいつてるの?」

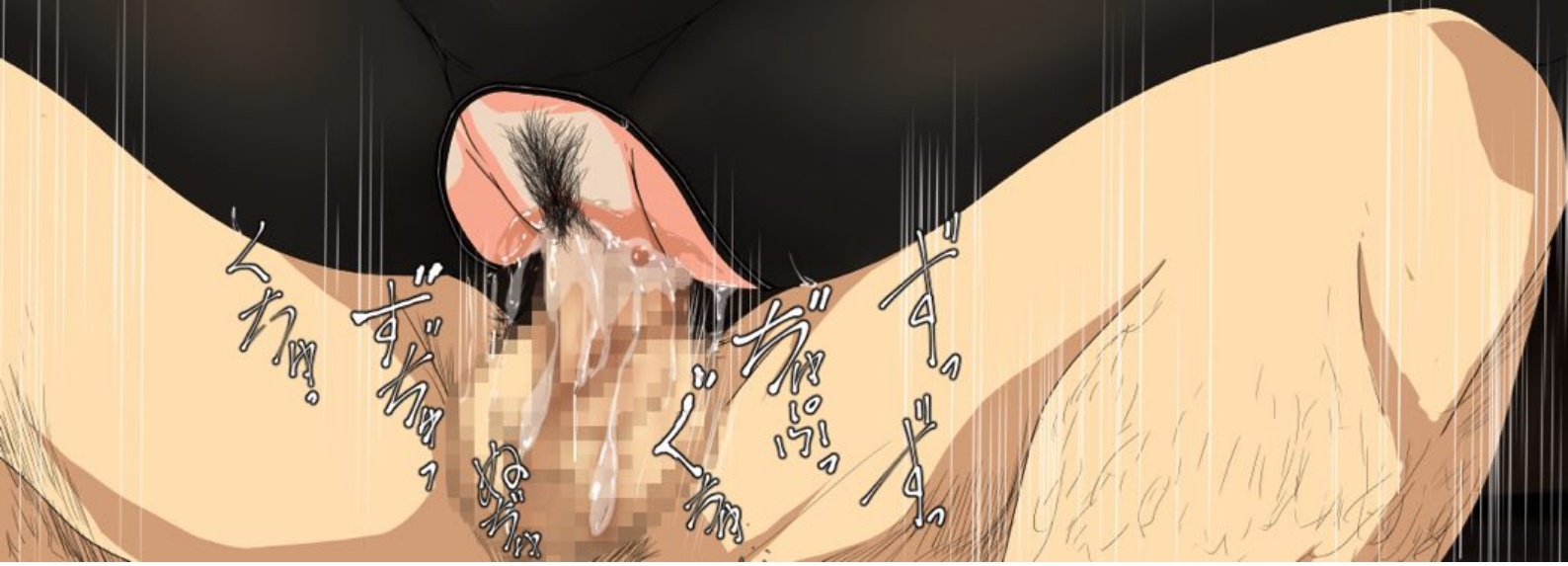
「え?」

「誰のくっさか何がいつてるの?」

*あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ*

*あぁ*

「M〇M〇ーオマ〇」が  
イしてるの、私のくっさか妊娠M〇M〇が  
××さんのおち〇ち〇んでイかされちゃってます  
「俺のち〇ぽに寧々ちゃんのかくっさかM〇M〇」臭が  
びびりしちゃったから困るよ  
「ほんとうにそうして困らせちゃってからなあ」



「あ、潮吹いてるよ ほら ビジュービジューしてる…」

「わ、わかってます…」

「寧々汗臭と寧々汁臭で  
部屋がすごかったよ…」

あ、♡

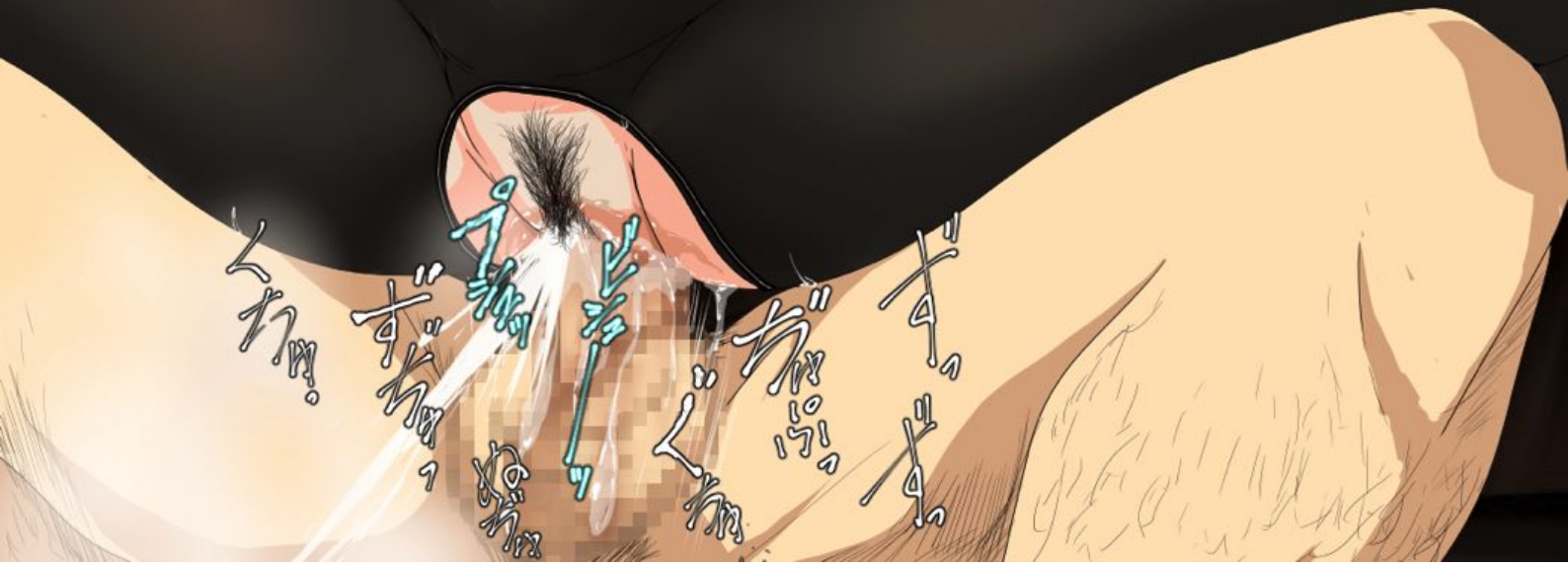
「寧々汁って…」  
あ♡♡

「○○君が部屋に入ってきたらエロいニオイで  
興奮しすぎて射精しちゃうんじゃない？」

「この時 ドアの向こうにいたよね たぶん…」

「すごい気配がしてたよね ニオイが漏れてたんじゃない？」

「え！…はずかしなあ…彼に臭いって思われたくないなあ…」



「あ、俺も寧々ちゃんにくっつきたくてグチユグチユのマ○コにイカされちゃったみたいだね」

「××さんの汚い精子を中に出されたわぁっ…いやだわぁ、体の中から汚されちゃってる感じ…ぶぶぶっ」



「その汚い精子で寧々ちゃんはこんなお腹ぼっころの姿になっちゃったんだよねっ」

「ほんと困るわぁ、私は○君の子供を産んであげたかったの…」

「ぶぶぶっ この時ドアの向こうで彼もそう思ったよ きっと」

「あく、精液があふれちゃって…もうう〜」  
「一回出したくらいじゃ全然おさまらないんだから…ホントに困ったおち○ちん」

「でも精液でグチヨグチヨマ○」かき回されるの好きでしょ？」

「好きじゃないですよ」  
臭くて汚い精液を早く洗いたい  
の…あくやだやだ」

「…そうだったんだ…じゃ今度から  
かき回すのもうやめるわ…」

「……うそ」

「え？」

「……っ！好きっ」

「……知ってた ふふっ」





「ああ結局 裸でも抱き合っただんだっけ……」

「そっだよ、もう4回も射精してたよこの時」

「何回も射精しちゃうのは寧々ちゃんが悪いんだよ  
いい匂いするこま〇」も気持ちいいから」

「それだけ？私のが好きだからじゃないの？」

「あ、あ、あ、  
「ん、俺は別に寧々ちゃん  
の事好きじゃないよ、  
精液便所だと思ってる」

「この時も 私のこと 好き好き  
愛してるって何回も言いながら抱きついて  
きたの覚えてないのお？」

「ん、 忘れた」

「ん、」





「あ〜やっぱり制服姿いいね〜」

「ぶふっ 少し前まで当たり前のように着て学校に通ってたんだよね…こんなに早く赤ちゃんを授かるなんて想像もしてなかったなあ…」

「俺は寧々ちゃんを一目見たときから俺の子供を産んでもらおうと思ってたよ」

「あ、やっぱり そうだったんだ…初めてのときもいきなり中に出されちゃったなあ そういえば」

「でもこの子は私と彼(〇〇君)の嫡出子ってことになるんだよ…」

「それはしかたないよ、俺は寧々ちゃんに種付けできればそれでいいんだ」

「そう…大事に育てるから安心してね」



「ねえ…」

「ん？なに？」

「こんなの見てたら…したくなってきちゃった…」

おしまい

次のページからは おまけシーンです

「ねえ、彼氏はまだ気がついてないの？自分の彼女が他の男の精子で妊婦にさせられちゃったこと……」

注△凜子の彼氏は催眠で気がつかないようにならせた

「えっ……う、うん……少し太った？って言うてたけど」

「鈍感とらうかが暢気とらうかが……でもそんな彼が好きなんでしょっ」

「ぶぶっ そうだよ」

「ほんとに彼の子供欲しかった？」

「あたりまえじゃん……うたぐ……ほんとに子供産まわねるとは思わなかったよっ」









「俺は無様な姿なんて思わないですよ……とても可愛いと思います」  
「ふふっ そうなの？でも貴方に可愛いって言われてもそんなに嬉しくないわ」  
「そんなぁ……」

「どんなに頑張って褒めても……わたしは貴方のモノにはならないわよぉ」  
「残念でしたぁ〜 ふふっ♡」

「♡♡♡♡♡」

「わ、わかつておかしな……」

「ぐずぐず、びんびん」



「この子産んだら また俺の精子で  
妊娠してくれますか？」

「んっ…んぶっ…そっ  
それは  
彼しいね…んはあっ…」

「彼氏さんがダメって言うても  
愛花様にはいっぱい俺の子供  
産んで欲しいんですよー」

「だ、だめっ…彼がダメって…  
言ったらあ…だめ…んぶっっ」

お、ず、ん、お、



「そろそろ産まれそうですね」

「んっ」

「本当は彼の子供を産みたかったですか？」

「.....」



「ねえ愛花様…このまま俺のモノになっちゃいましょうよ」

「ん————っ ん————っ……」

「彼氏さんと別れてずっとこうやって俺とセックスしましょうよ」

「ん————っ んん————っ んっ んざっ!!」

「ふふっ 冗談ですよ、俺は愛花様のマ○コに出せればそれだけで満足ですから」

「ん"っっ ん"ん"っ!!!」

「産まれてくる子が女の子だったらすく〜 こじやって  
寧々ちゃんと一緒に散歩させよっか？」

「だめっ、こんな恥ずかしいこと この子にはさせないからね」

「あららら…残念…」

「〇〇君と大事に育ててるんだから…  
あなたのお願いは私が聞くから、それでいいでしょっし〜」

「そうだね」



「そのお腹、誰の子が入ってるの？」

「え〜？知りたいの？」

「うん」

「ぶぶっ 貴方と私のあかちゃんでしょう♡♡」

「どうしてそうなったんだっけ？」

「あなたが私のオマ○に おち○ちんズプズプして  
何度も何度もピュッピュッしたからでしょう♡♡」

「あ、そうだったあ〜、○○君の彼女なのにやりすぎちゃった…」

「ホントにしょうがない人♡」

ちん。

びゅわ  
びゅわ





「もう子供の名前決めた？」

「うん まだ…」

「〇〇君が考えたの？」

「うん…せめて名前くらい  
俺で決めさせてっつて」

「そっかあ〜」

「何人くらい子供し〜？」

「ふふっ あなたが欲しいだけ  
産んであげる♡」



## 特別編

本編とは関係のない独立したものになってます

ショートでちょっとハードな内容になってます  
鼻フック スパンキング ポテ腹 乳首ピアス  
外道なセリフ・シチュエーションなどなど

気がつくとな彼女達は何故か陸上用のウェアを着せられ

目隠しをされ拘束されていた



何がどうなったのか？困惑する三人

近づいてくる気配を感じる

「みんな気がついたみたいだな…えっと困惑してると思うのでこれからいろいろ説明します、あ、君達からの質問や拒否などは受け付けられないので静かに聞いてください」

そうは言われたものの  
フウフウ ガチャガチャ取り乱す  
三人、しかし男はかまわず続ける

「残念ですが君たちはもう元の生活には戻れません…」  
「コ」で肉便器として壊れるまで使われることになります」

「フウ〜」「…?」「ん〜っ〜」

「ピンと来ない子がいるみたいなんです、具体的に二例を挙げると、えっと…いろいろさせられるんですけど、わかりやすいのは…オマ○」におち○ちんをスポスポされまくって中だしされます、当然避妊はしないので妊娠しちゃいます」

三人は全身で拒否の意思を表明する

「ああ、そんなに拒否表明をしても無駄だよ、現実を受け入れて肉便器として頑張りましょう、僕がサポートとメンテナンスを担当するんで、これからヨロシク」

「んんん人ともいい感じに蒸れて よい匂いがするゝ ふんふん…でできることなら 僕のモノにしたいよ…」

「まあ あんまり心配する必要はないよ、すぐに頭のほうがちよっと おかしくなっていて、楽しくなってくると思う……だいたい皆そうだから」



「萎えちゃうくらい激臭の女の子は別の所に送らないといけないからちよつとチエックするね〜」

「おほーっ…やっぱりアソコに接地エリアの匂いは…最高だね…クラクラする…」

「三人とも大丈夫だな…というかかなり良いな…これは僕が貰っておこう…んふふ」



誰か助けて

そんな彼女達の願いは誰にも届かなかった...

彼女達に支給される服は担当の趣味でびっちり系のスポーツウェアばかり 数日間同じものを着させられ その後回収される

「ほらほら～ オマ○コに出しちゃうぞお～」

「あっ…ああっ…や、やめ…て…くださ…い…  
ほ、本当に…妊娠して…しまうから…あ…」

「いい事教えてあげるね、ココには  
出産の設備も医師もいるから安心して  
妊娠していいよ」

「そ…そんなっ…んあっ あっ ああっ…」

ズパッ  
ズパッ  
ズパッ

品々入替

「いっぱい赤ちゃん産めるよ  
よかったね～」

「……あっ……ああっ……」



「うおっ…で、出るよ…んっ！」

「はあああっ…ああっ…あ…あ…あ…」

「ふう～…でるでる…んふふ…俺の  
精子で孕んでるといいなあ～」

「ああ…ああ… …だめえ……」

どかどか  
んんんん  
んんんん

んんんん

んんんん

品々入替

んんん

んんん

「ふふっ やっぱ新入荷の便器は  
リアクションが初々しくていいなあ」

んんん

「そうそう、そうやってバケツに精液をためてね、溜めた量に応じて  
ご褒美がもらえるから頑張って」

「……………」

「さあ、それじゃあまた おち○ちん突っ込んで  
精液排泄してもらおうから こっちに來て」

「も、もう…許して…ください」

「僕に言われても…どうすることもできないんだよ  
僕だって命令されてるだけだし…出産したら  
しばらくお休みもらえるから…さあ、頑張って」

「……………」





「んあゝ…とりのあゝす俺もオマ○」  
「排せしちゃうね…んっ！」

「…うせせ…うせせ…うせせ…うせせ…うせせ…うせせ…うせせ…うせせ…うせせ…うせせ…」

「俺、ボテ腹の子とちのの好まなから  
早く妊娠してね」

「ん…ん…ん…ん…」

「ん…ん…ん…ん…」

「ん…ん…ん…ん…」

「ん…ん…ん…ん…」

「ん…ん…ん…ん…」

「もうあきらめて 精液便器の生活を  
楽しんだ方がいいよ」

「そんな…ひどい…私は…便器じゃない…」

「んあゝ…」



「どろっ…便器生活 楽しんでっしょっ？」

「そ、そんなわけ…ない…でしよ…」

「マ○」に精液を排泄されるの好きじゃないの？」

「好きなわけではないでしょうっ…ホントに妊娠しちゃうからあ…も、もう許して…」

「そうか…嫌なのかあ…うん…じゃあこうしよう  
マ○」が嫌ならケツの穴に精液を排泄してもらおうね、それなら  
妊娠しないし、マ○」は使用禁止シールを貼ってあげるよ」

「そ、そんな…いや…いやあ…」





「兼持ちささるくぢん...」

「んあ...おせおせささ...おせおせささ...」

「せつと混ぜちゃおう んぶぶじ」

「んあ...おせおせささ...おせおせささ...」

「んあ...おせおせささ...」

「...んあ...おせおせささ...」

使用禁止

「肛門でピクンピクン感じるようになったね」

「あ〜…あああ…へああ…」

「「」まで開発した後で言いくいんだけど…  
やっぴのマス○「使わせて妊娠させろって言われちゃったよ…」

びく…

びく  
びく

びく  
びく  
肛門禁止

びく  
びく  
びく  
びく

びく

「ちゃんとケツ穴にも おち○ちんスポスポされると  
思っからく無駄ではないよ、うん」

「あ…>>>…>>>…>>>…>>>…>>>…>>>…>>>…」

団体の相手もさせられる3人  
次から次へと体内に精液を注ぎ込まれる...





「いや、また良い便器を入荷したね」

「本当」「この子達孕まされちゃうんですか？」

「そつだよ、君も遠慮せずバンバンマ○□に出しなよ」

「ホントはピルとか飲んでるんじゃないんですか？」

「肉便器にそんな事するわけないでしょ、数カ月後にはこの子達はホテ腹でさせられてるよ」

「こんなメチャクチャやられてたら誰が父親かわからないですよね」

「まあ、わからないね…ま、どうでもいい事じゃん、そんなに大事なことは俺達はこの子達を好き放題でできて、この子達は服従するしかないって事」



このように無慈悲な仕打ちは継続され

ついに彼女たちは・・・

「あ……あ……お、お腹はあんまり……たたか……ないで……ください」

「ああゴメン、お腹禁止って書いてないから……  
君……」「」に連れてこられて長いのっ？」

「あ……えっ……と……一年くらい……です……」

「そっかあゝ まさか妊娠させられて鼻フックさせられて  
ひっぱたかれながらオシッコさせられるなんて……  
一年前は想像もしてなかったでしょ？」

「……あ……はら……」

ひっぱたく  
オシッコ出ます

精液を  
顔に  
かけると  
ヨロコビます♡

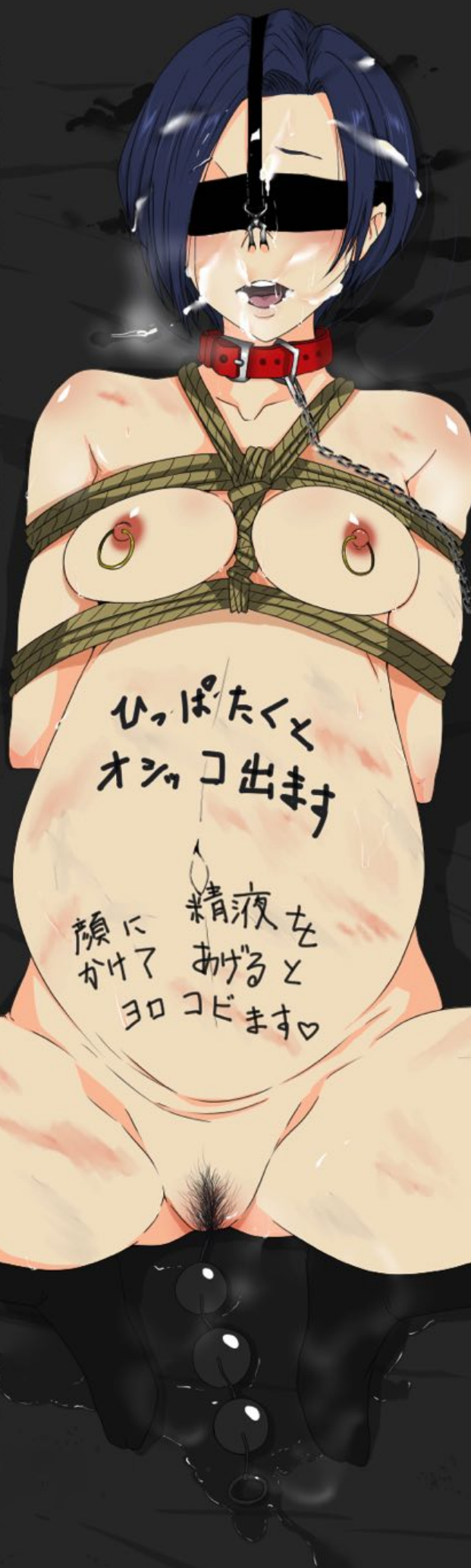


「ふう〜 結構出たな…俺もまだまだいけるな んふふ  
あれ？顔に精液かけると喜ぶんじゃなかったのかな??？」

「あ…う、嬉しうす…あ、あつがう…いれまわ」

「ねえねえ このお腹の子は誰が孕ませたの？」

「…わ、わかりません…」



ひっぱたく  
オシッコ出ます

顔を 精液を  
かけてあげると  
ヨロコビます♡

「わかんないの！…ひどいなあ〜 ねえ？」

「…あ……………う、うん……………」

「そっか〜 カワイソウに……」

「あ、鼻フックと目隠し取ってみていい？」

「F-U-J-I-N-YU」

「お、可愛い顔してるじゃない?」

「あ、あつがとんじけろあつあつ…」

「また様子を見に来るから  
…頑張つてね それじゃあね」

「あ…ま、またのお越しを お待ち…しています」

「元気でいてよ 壊れちゃったりしないでね」

「が…頑張ります」

ひっぱたくと  
オシッコ出ます

精液を  
顔に  
かけると  
ヨロコビます♡



「愛花ちゃんって優等生だったんでしょ？」

「いいえ…そんなことは…あっ」

「勉強もできてテニスもすごく上手だったって聞いたよ…でもまあ 肉便器になっちゃった愛花ちゃんには、もうどうでもいいことかあ〜」

「…は、はい…」

「こうやってずっと壊れるまで便器なんだから勉強なんかできても意味ないもんね ふふっ」

「…はい…便器の私には…無駄な…モノです」



「あ～愛花ちゃん…いいよ…いいマ○コだよ」

「あっ…ありがとう…ございます…」

「ココに連れてこられるまで処女だったの?」

「…はい…しょ、処女でした…」

「ははっ なのに肉便器にされて妊娠させられ  
ちゃったんだ」

「……はい……」

「そんなお腹になっても毎日おち○ちん  
突っ込まれてるんだ」

「…はい…」

「元気な子が産まれるといいね」

「はい…ありがとうございます」



「も、もうしわけ…ござ いませ…ん…  
ま、マ○コが…イってしまいそう…です…」

「いいよいいよ 好きなだけイっていいよ」

「あ、ありがとう…ございますっ…」

ズパッ  
ズパッ  
ズパッ

ズパッ  
ズパッ  
ズパッ

「おあ…あ…マ○コお…  
イってます…い、イってますう…  
イって…あ…あ…あああっ」

んお、心  
おお…

ズパッ

ズパッ

ズパッ

ズパッ  
ズパッ  
ズパッ







「そうやって精液溜めてるの?」

「そりゃあもーらひびき溜めなんよ  
ご褒美もらえんぞだよ」

「いっおんになに溜まったり...ずいぶん褒美  
かかるとは...うん...うん...うん...」





「今日も頑張ってるね」

「はい」

「じゃあいつもの宣言」

「はい…私は人としては終わり  
肉便器として生まれ変わりました。  
皆様の排泄物を体内に捨てられる  
設置物として一生を捧げます」

「はいオツケー じゃあマ○」から  
溢れた精液はその容器にためてね」

「はい わかりました」

「マ○LJ精液JHT—JHT—ヤねの  
好きなの？便器ぢやこ？」

「あ♡は♡い♡は♡は♡♡♡」

「じゃあ毎回く○をクチロククチロク  
挿れ回されて幸せなんじゃな？」

「うん…うん…おっけー♡♡」

「そっかあ…じゃあ  
壊れて処分されちゃう時は  
頻繁に使うて来るね」

「お♡は♡は♡…おっけー…  
たぐれ…使ひたいわさ…」

あ♡は♡は♡

おっけー

は♡は♡

は♡は♡

は♡は♡  
は♡は♡

は♡は♡  
は♡は♡







「清掃機能も上々だね…この便器は」

「んはあ♡…あ、ありがとんじゅとまっ…」

「このいっぱい溜まった精液はどっにするのっ」

「んっ んっ…あ、あとで全部飲みます…」

「そ、そうなんだ…大変だね…」

「わ、私は…精液便所ですので…  
全然平気です♡」

「ありがとっ、さっし綺麗で  
なったよ」

「ご利用ありがとうございます」



「寧々ちゃんは男の人におっぱいさわられた事あるの？」

「んっ…な、ないですよ…」

「じゃあ俺が初めてなんだ」

「そ、そうなりますね」

「乳首コリコリは？」

「んっ…あっ…  
は、初めてです…」

「そうかあ～ いっぱい弄くってあげるからね  
ビクビクに感じて日常生活が困難になるくらい  
開発してあげる」

「そ、それは…遠慮しておきます…あっ♡」





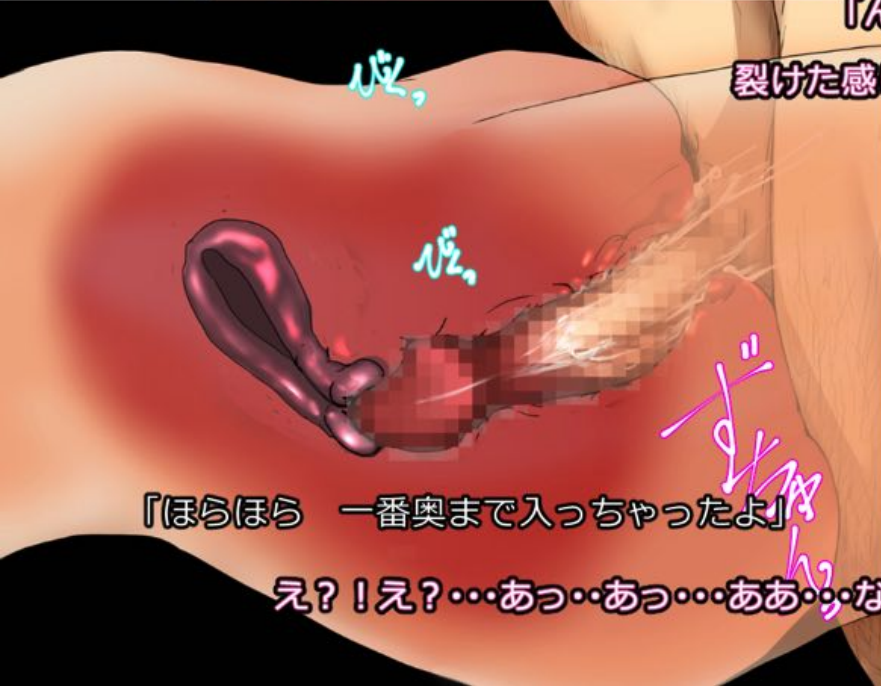




「ほら どう？寧々ちゃん どんな感じ？」



「んっ…んん…ん？」



裂けた感じがしたのに…い、痛くない？！

「ほらほら 一番奥まで入っちゃったよ」



え?!え?...あっ...あっ...ああ...な...なに...この感じ...

「どうかなあ？その様子だと俺たち相性いいみたいだね」

「えっ…」

「初めてなのに 奥まで入れて子宮口突かれても痛くないんですよほらっ」

「あはっ…んんっ…」

あんなに大きなモノが入ってるのに…ホントに痛くない…それどころか…なんか…じわ…とキモチよくなって…おてる…さっきの話…本当なの…







「イキそうなんですよ？初体験でマ○コ  
イっちゃいそうなんですよ！」

「な、なんか コワ…い…な、  
なんか…あっ…いっ…いくっ」

「マ○コがイったら 俺の精子の味を  
マ○コに教えてあげるからね」

「あ…だ、だめ…中に…はあ…  
あっ…んああっ…アッ アッ  
だ、出さ…ないでえ…」

「じゃあ イかないように我慢しな」

「んああ だ、だめえ…も、もう だめえ…  
いっちゃう いっちゃうからあ…」



我慢などできるはずもなく  
寧々は絶頂してしまい  
××の膈内射精をゆるしてしまう

膈内射精を拒絶をじたものの  
体の中に精液が染み渡るゾクゾクするほどの  
快感を感じてしまう

その信じられないほどの快感に頭が  
真っ白になってしまった

おお  
おお









そして寧々はまたしても  
膣内に××の汚い精液をぶちまけられる

膣内に射精されると強烈な快感に襲われる  
催眠をかけられているので、目を見開いて  
絶頂してしまう寧々





ほんのつい先ほどまで誰にもよじられて  
いなかった彼女が...

今ではこの有様...  
処女を奪われ  
精液の匂いと味を教え込まされ  
××に膣内射精をゆるし  
快感に酔いしれ痙攣している













































